



## 第1話 二丁拳銃

---

私は殺気立っていた。しかし何に腹が立っているのか、わからない。  
好きな仕事だし、好きな人に囲まれているし、なにも不満はないはずなのに。  
状況がそうさせるのだと私は気づいた。

私の周りだけ時間が異様に早く過ぎているようだ。  
皆は暇だという。私だけやることが溜まっている。生ごみのように今にも腐りかけている「やらなければならないこと」が溜まりに溜まって、腐臭を放っている。

一つやり遂げると、二つ「やらなければならないこと」が増える。そして永遠にやることは終わらない。

何のために生きているんだろう。あくせく働いて。本当にやりたいことは何一つできていない。

「もう何も頼まないで」と私は叫んだ。  
一人になりたい。

私の心は隙間だらけで、重心が右に左に揺れ動いていた。少しでも誰かがつつけば崩壊するだろう。  
私はその瞬間を待った。

そしてその瞬間が来た。

私は蜘蛛に頼んでいた。  
「ここに蜘蛛の巣をはらないで」  
「わかった」と蜘蛛は承諾した。それなのに。  
蜘蛛はそこに蜘蛛の巣を張った。

私は爆発した。

「はらないでって言ったのに！」

私は蜘蛛の巣をめちゃめちゃにした。蜘蛛の巣が私にまとわりついて、身動きがとれなくなった。

その時、雨が降って来た。私はそれにも腹が立った。なんて絶好のタイミング！！  
私は発狂した。

「なんで雨が降るの。止めて欲しいんだけど」  
私は空に叫んだ。



## 第2話 撤収

---

「あーああ、今日もだるい」人差し指が言った。

「肌がカサカサになっちゃう」親指は顔じゅうにハンドクリームを塗りたくった。

銀行員の親指は毎日お金を数えるために手の水分が奪われてしまうのだ。

そして先ほど今日もだるいと言っていた人差し指は、基本的にボタ的なものを押すのが主な仕事だが、親指と共同で書記の仕事もかけ持っている。他にもあらゆる作業でオールマイティに仕事をこなし、親指とツートップで仕事を任されている。さらに最近ではボタ的なものだけでなく、タッチパネル的なものを押す仕事がなぜか激増し、そのせいで人差し指の仕事は激務となっている。

中指はパソコン操作の際には活躍を見せるが今は眠っている。昼の休憩だ。

薬指には糊のカスが乾燥してこびりついている。

「どうしてちゃんと手を洗ってくれないんだろう」

薬指は神経質なのだ。土木関係を担う薬指は、ツートップを温存するためにチューブから出された糊をのりしろに広げる役目を任されている。神経質の割には、薬指はこの仕事が気に入っている。しかし糊を貼り終わった直後に指同士でごしごしこすり合わせられるのは気に入らないらしい。本当は石鹸できれいに洗ってほしいと思っているのだった。

小指は一見弱そうに見えるが、担当は運送業務だ。物を持つときに小指の支えがないと、安定しないため、親指が激怒する。

しかし運送業務とは言っても、それは小包担当で、大物を運ぶには、足の指たちの力を借りなければならない。小さな靴の中で外反母趾になりかけながら、足の指たちは頑張っている。仕事のあるところまで、皆を移動させるバスの運転手的役割も果たしている。

昼の休憩が終わった。仕事の再開だ。

足の指が皆を運ぶ。ほら、右に仕事あり、左に仕事あり。前方に障害物あり。右にカーブ、左にカーブ、立ち止まってまた急発進。キュキュッと靴が鳴る。

前方に重いもの発見。全員でそれを持ち上げる。この時ばかりは、中指も休んでいられない。ふんっと食い込むビニールひもに負けないようにお腹に力を入れる。親指はちらっと小指の方を見る。小指は真面目に支えている。物を置くと、ふーっとみんな息を吐く。ようやく血が巡ってくる。一休みする間もなく、次の仕事が待っている。

次はあっち、次はこっち。そしてみんな全速力で仕事をやっつける。どんどんどんどんどんその時だった。

「ひゃー—————」と膝が悲鳴を上げた。

「いたい、いたい、いたい」

皆びっくり。こんなことは今までなかったのだから。

それを聞いた肘が「てっしゅ—————う」と叫んだ。

皆一斉に仕事から手を引いた。

### 第3話 黒船躑躅

---

僕は川べりを歩いてきた。目的地ははっきりとしていた。時間もそんなになかった。それなのに。

視線の端に何か映った。僕は足を止めようかと思ったが、目的地がはっきりして、時間もそんなになかったから、そのまま通り過ぎた。けれど通り過ぎてから、あれは何だったのだろう。そして、今を逃せば、もう一生あれがなかったのか、知ることはできないだろうと、そう思い始めた。

「どうしていつも僕はこうなんだろう」

一度気になると、どうやってもその思いから抜け出せない。もう、時間がないのに。

仕方がないので、僕は来た道に戻ろうと、Uターンをした。急いでいたもんで、足が、ぬかるみにはまった。僕はよろめいた。そしてそのまま川にぼっちゃんとしてしまった。あーあ。

そして僕はその先を見た。

淡いピンクの君を

僕の周りをさらさら流れる川の音。

そしてずっと僕は見ていた。

「どうしていつもこうなんだろう」

僕はそこから離れられなくなってしまった。目的地はここだったのかもしれない。僕は時間も気にせずに、そんなことを思った。

## 第4話 一方（一かた）

---

とある公園のベンチに、おじさん二人が座っていた。このおじさんたち、さっきまでは赤の他人だったが、ただ同い年というだけで意気投合して、今このベンチで二人、星空を眺めている。

あの、教えて欲しいんだけど。とおじさんAが言う。

なに？とおじさんBが言う。

おじさんAはここから、人生悩み相談を始めるので、覚悟してほしい。

おじさんA「生きる方法ってやつをさ、知りたいんだ」

おじさんB「生きる方法？」

A「そう。」

B「ったって、もうこの年まで生きてるじゃないの。俺が逐一教えなくたって、あんたもう、生きてるじゃないの」

A「そうなんだけどもさ。この年になっても、改めて思うのさ。生きていくのはなんて大変なんだろうって」

B「まあ、悩みを話せよ」

A「悩みってほどのことじゃないんだ。たださ、毎日時間に追われて、一つやることを終えたら、また一つ、いや、二つか三つくらいやるが増えてさ。ようやく半端な時間ができて、よし、好きなことをやろうと思っても、何をしても気分が晴れなくて、息苦しくてしょうがないんだ」

B「ほう...そうか」

A「なあ、生き方ってやつを教えてくれよ」

B「俺がそんなの知ってると思うのか？」

A「いや、だめもとで」

B「知ってるさ」

A「知ってるのか？いやー、今日はいい人に出会った」

B「よく食べて、よく寝て、酸素をいっぱい吸うことだ」

A「あら、しごく簡単に言うね。光合成みたいに」

B「そう。光合成と同じよ。花みたいに何日か咲いたら、枯ればいい。何の責任もないのよ」

A「はあー、そういうもんかね」

B「そういうもんよ。考えてもみれ。宇宙から見たら、人間なんて花みたいなもんよ」

A「きれいに見えるのかね」

B「さあ、それはどうか知らんがね。きれいっていうのは植え付けられた概念で...」

A「なんだか簡単じゃなくなってきたな」

B「そう。だからあまり深く考えないこった。さあ、いっぱい寝るために帰ろう」

A「そうだな。ああ、そうだった。駅までの行き方教えてくれよ」

B「あ、ここからまっすぐ行けば駅だよ。あんた、どこから来たの？駅から来たんじゃないの？」

A「確かに駅からは来たんだけど、知らない駅で適当に降りて、何も考えずにぶらぶら歩いてたんだ。そしたら、ここに辿り着いたってわけだから、あまり何も知らないの」

B「あはあはあは」

A「変な笑い方」

B「あんたね、俺に聞かなくても、生き方わかってるじゃないの」

A「そうかい」

B「ああ、いい人に出会った今日は。じゃあ、また。良い酸素、いっぱい吸うんだよ！」

A「良い酸素ってなんだよ。じゃあ、おやすみ」

そう言って二人のおじさんは、永遠の別れをしたのでした。

おわり

## 第5話 嘉賞（かしょう）

---

今日は後輩が大幅な遅刻をしてきた。してきた、というか、まだ会社に着いていないのだから、遅刻している最中である。

「何をやってるんだ全く」

いつもはかわいい後輩だが、何の連絡もなく、一時間も遅刻となると、これは叱ってやらねばなるまい。私は携帯を取り出すと、かわいい後輩の電話番号におそるおそるかけた。

しかし後輩は電話に出なかった。

私は怒りを乗り越え、今度は心配になってきた。もしや事故にでもあって、携帯にも出られない状態なのではないか。

とりあえず私は、後輩にメールを送った。

「何してるんだ。遅刻だぞ」

返事は、12分後に返って来た。その文面がこれである。

「今、チューリップを保護しています」

私は目を疑った。チューリップを保護？一体、何をしているのか、想像もつかない。

子犬を拾ったとか、そう意味で保護と使うのはわかるが、チューリップの保護など、聞いたこともなかった。しかし、私が知らないだけで、なにかそういう活動みたいなものが、世の中で認知されているのかもしれない。そう思いなおした。そしてそれを知らない私を後輩に知られるのが怖くなって、こうメールを返した。その文面がこれである。

「そうか、それはえらいな。」

保護と言うからには、なにか良い活動なのだろう。

「ありがとうございます」

今度は即座にメールが返って来た。

しかし、先輩として、これでメールを終わらせるわけにはいかない。

「けど、それは仕事より優先することなのか？」

すると今度は15分後にメールが返って来た。

「ボランティア活動です」

「ボランティア活動？」

私はまたメールを返した。

「だからと言って無断で休むのはだめだ。ちゃんと会社に連絡しろ」

しかし、それから、いくら待っても返信が返ってこなかった。

私はデスクで耳かきをしている社長にとりあえず今の状況を報告しようと、席を立った。

「社長。後輩のことなんです。」

「ああ、どうした」

「なんだか、ボランティア活動してるようで。連絡させるように言ったのですが、何か来ましたか？」

「いや。ボランティア活動ね…。じゃあ、今日はボランティア休暇だな。」

社長は付箋に何か書き込むと、机の端にぴっと貼りつけた。

「それでよろしいんですか？」

「ところで、なんのボランティア活動してるんだ？」

社長が興味を持つとは思わなかったので、私はあえて触れなかった言葉を慎重に取り出した。

「えー、チューリップの保護だそうで」

「ああ、チューリップの保護ね」

社長は、目の前にあった何らかの書類に、ばーんっと判子を押した。

やはり、チューリップの保護活動というものが、あるのだ。と私はこのとき確信した。知っているふりをして良かった。と心の底から思った。

とりあえず、私にできることはやった。そう思い、自分のデスクに戻った。

「ふー」

椅子の背もたれによりかかり、何気なく窓から外を見ると、社内の花壇の中に、傘をさしてしゃがんでいる人影があるのが見えた。私はぎょっとして、よく見ようと窓に近寄った。

よく見ると、その人影は、後輩だった。

私は思わずデスクから叫んだ。

「社長、あれを見てください。あんなところにいましたよ」

すると社長は特段驚きもせず、こう言った。

「偉いじゃないか。これで、ジュースでも買ってやんなさい」

社長は自分の長財布から、110円を取り出し、私に渡した。

120円なのに...

私はこっそり自分の10円を足して、自販機で桃のジュースを買った。

外に出ると、日差しが暑かった。

後輩は、土の上にしゃがんでいた。そこにチューリップが生えているのかと、私は目を凝らしたが、何も生えている気配はない。しかし、土の中まで透視できるわけではない。もうすぐそこに、チューリップが芽を出しているのかもしれない。しかし、変な質問をして、チューリップ保護の実態を知らないことがばれたら、元も子もない。私はその質問を心の中にぐっとしまった。

私は後輩のそばに寄ると、ジュースを差し出しこういった。

「ほら、社長からだ」

それと私から。それも心の中で言った。たかが10円ぽっちで、言えることではない。

後輩は、顔を上げた。

「あ、ありがとうございます。」

「がんばれよ」

私はそう言い残し、社屋に戻って行った。

## 第6話 弓取

---

トスっという音がして、頭に何か刺さったようだ。

痛いというよりは、かゆいに近いような刺激だった。

僕は膝をついて、床に倒れ込んだ。その時、両腕をつかまれて、自然に僕の足は宙に浮いた。

体が軽いのだ。僕が足を動かすと、空気の中に少し重たい空気があって、その上を歩いている感覚になった。

両腕をつかんでいるのは誰だろう。僕は横を見回した。そこには、手だけの人があった。手から先は薄くて見えなくなっている。そして声だけが聞こえる。

「あなたは選ばれました。今から一緒に来てもらいます」と。

「選ばれたとはどういうことですか？」

「何に選ばれたかは、これからわかることです」

「では、どこへ行くのですか？」

「どこへ行くかは、これからわかることです。はい」

ぼくは軽い足取りで、先を急いだ。急ぐ必要もないのだが、自然と足が向くという感じだった。

両腕を引っ張られる感覚と、自分の足で歩いている感覚が、妙に協働して、息ぴったりの二人三脚をしているみたいだった。

「はい、着きましたー」と手の主が言った。

「ここがどこだかまだわからないんですが」

「あなたには、これをしてもらいます」

「これ？」

「まずこの矢を持ち、射ってください」

手がひらひらっと動くと、とたんに弓と矢が出て来た。

黒曜石を矢じりにした、木製の弓と矢だった。

「何を射るんですか？」

「人をです」

「人を？そんなことはできませんよ」

「大丈夫。これは、矢じりの先端に、特別なコーティングがされていますから、当たってもそんなに痛くないんですよー」

「はあ」

「そしてね、当たった人には、良いこともあるんです」

「良いこと？」

「そう。これは、なんと、思いをかなえる、弓矢なんです！」

「ははあ、なるほど。わかりました。じゃあ、私は、恋のキューピッドというわけですね」

「あ、勘違いなさらないでください。皆誰しも、いつだって恋をしたいと思っているわけではありません。人の願いは人それぞれ。それをあなたが、みいんな、かなえてあげられるのです。ね、素敵な仕事でしょう？ささ、早く射ってごらんなさいよ」

「まあ、そういうもんですかね」

縄文風の弓矢は気になったが、ちょっとやる気が出て来た。

「でもこれ、どうやってやるんですか？ぼく握力22なんですけど」

「気にしない、気にしない。ちょっと引いて、放すだけなんです。一度やってみなさいな」

「はい」

ぼくは弓を手にとると、腕に力を入れて矢を引いた。その瞬間、一瞬あの手が現れて、ぐっと引くのを手伝ってくれた気がした。そして、手を離すと、ぴゅーっと飛んで矢が飛んで行った。

「ちょっと、今手伝ったでしょう」

「いえ、何も」

「今、見えたんですよ。あなたの手が」

「気のせいじゃないですか？さ、それより、矢があたりましたよ。よく見てください」

「何も見えないですけど」

「そんなはずはありませんよ。よく見てください」

手がまたひらひらっと動いて、そこにはカードが一枚握られていた。

「このカードの小さな穴から、覗いてごらんなさい。見えますから」

「なんですか、このカード」と言いながらぼくはカードに空いている小さな穴を目に当てた。

「テレホンカードです」

「ずいぶんつかしいですね。もう持ってないや」

「ほら、どうですか？見えて来たでしょう」

小さな穴から覗く世界は、周辺は少しぼやけていたが、遠くの景色がはっきりと見えた。

その中に、一人のサラリーマン風のおじさんがベンチに座って目を閉じているのが見えた。

「あの人にあたりましたよ」

「えっ？もしかして死んでしまった？」

どうしよう、とぼくは思った。やっぱりコーティングなんてしただけじゃ、だめだったんだ。

「ご安心ください。寝ているだけです」

「え？寝てるだけ？」

「そうです。さっきまであの男性は、駅のベンチに座って、溜息をつき、こう思っていました。「眠たい」と。そこであなたが放った矢で、あの男性は、睡眠を手に入れました」

「思いをかなえるってそういうこと？なんかぼくがいなくてもできそうだけど」

「そんなことはありません。眠い時に眠ることは、なかなか簡単にできることではないんですよ」

「そういうもんですか」

「では次は、あの女性に矢をあててみましょう」

ぼくはまたテレホンカードの穴を覗いた。そこには、髪の高い女性が歩いていた。

「あの女性は今、とても時間が欲しいと思っています。そこであなたが、時間をあげるのです」

「時間をあげる？」

「では、射って見てください」

ぼくはまた矢を射った。また矢を引く瞬間だけ手がちらっと見えた。

「やっぱり手伝っているでしょう」

「いえいえ、そんなことはないですよ。さあ、またまた命中しましたよ。さすが、私が選んだだけのことはある」

女性は前と変わらずに歩いているように見えた。

「あの一、何も変わらないように見えるんですけど」

「そんなことはありません。女性の右ポケットをご覧ください。さっきよりちょっとふくらんでいるでしょう」

「そうですか？」

「あそこに、時間が入っています。そして女性の顔。特に表情に注目してください。さっきより、満足した顔をしているでしょう」

「そうですか？」

「もう、彼女は時間に追われてはいません。時間を小さくまとめて、ポケットに入れてしまったのですから。もう彼女は時間から解放されました」

「そういうもんですかねえ。まるめたハンカチが入っているだけでは？」

「そんなことはありませんよ。さあ、次が今日最後の仕事です」

「あの公園で遊んでいる子どもを見てください」

「はい、いますね。女の子が」

「あの子は今、恋をしています」

「そういうのも、やっぱりあるんですね。キューピッド的な」

「はい、でもそのことじゃありません。あの子は、その恋をあきらめようとしています。それを手伝ってください」

「えっ、そんなこと！」

「時に、恋をあきらめるのは、恋をするより難しいものなのです」

「なんかいきなり格言みたいのでしたね」

「では、お願いします」

「事情もわからないのに、いいのかなあ」

「それは、察してください」

ぼくは矢を射った。またちらっと手が見えた気がしたが、もう無視した。

砂場で遊んでいるその少女の頭に、その矢は当たったようだった。女の子はしばらく頭を押さえていた。そして、立ち上がると、水飲み場の方に行き、ごくごくと水を飲んだ。そして飲み終わると、ぷは一とって、口をぬぐった。その顔は、さっぱりとしていた。

「ふっきたようですね」

「なんだかせつないなあ」

「さ、これで今日の仕事は終わりです」

「さっきから、仕事、仕事って言ってますけど、これがぼくの仕事になっちゃたんですか？」

「そうですよ。あなた、矢に当たる前、何考えてました？」

矢に当たる前？

ぼくは記憶の底に沈んでしまっていた、頭の変な痛みを思いだした。そして思い出した。

「ああ、そういえば、天職につきたいなあって、思っていました」

終わり

## 第7話 入貢（にゅうこう）

---

むかしむかし、あるところに、なまけものが一匹住んでいた。

なまけものが住んでいる国は、とても暖かい所だったんだけど、ある春の日、こんなうわさがたったんだ。

それは、今年の冬に、遠い国から冬将軍が攻めてくるといううわさだった。

なまけものは寒いのがうーんと苦手だったから、こう思った。

冬将軍に来てもらわないように、頼みに行かなきゃ。

手ぶらで頼みに行くのもなんなので、なまけものは冬将軍にプレゼントを持って行くことにした。

なにがいいかなあ

なまけものは考えた。

なまけものは寒いのがうーんと苦手だった。だからこう思った。

あったかーい、マフラーを作ってあげよう。

なまけものはゆっくりと編み棒を動かした。そしてゆるゆるのマフラーができあがった。しかしなまけものはゆっくりだったので、それができた時にはもう、なまけものの住む国へ冬将軍が片足を踏み入れていた。

なまけものはゆるゆるのマフラーを持って、冬将軍の下へ向かった。そして冬将軍が目の前に立った。

「冬将軍さん、わたしは寒いのがうーんと苦手なんです。だから、これを差し上げますから、どうか私の国には来ないでください。おねがいします」

冬将軍は複雑な気持ちだった。

こののろい生き物は、何を考えてマフラーなんか差し出すのだろう。自らが生み出す寒さから、自分を守れというのか。

冬将軍はなんと答えていいのかわからなかった。そしてただ、立ち止まっていた。

なまけものは必死でマフラーを差し出した。

しかし、寒さに弱いなまけもの。身震いすることもできなかった。

冬将軍は決意した。

ひゅーりと風でそのマフラーを巻き上げ、そしてふわりと首にかけた。なまけもの首に。

閉じかけていたなまけもの目が開いた。そこには、去っていく冬将軍の後ろ姿が見えた。

「ありがとうございます。冬将軍」

なまけものは、暖かいねぐらへと帰って行った。

おわり

## 第8話 逸らす（そらす）

---

「つまり、こういうこと？」

僕は彼女から視線を逸らした。

「まあ、そういうことだけど」

「問題は、そこね」

「問題？答えがあるのかい」

「どうでもいいことじゃない。答えなんて。」

「どうでもよくはないよ。なんでそんな風に思うの？」

「問題は、問題自体にあるのよ。それには答えなんかない。ただその問題を解決すればいいだけ」

「だから、答えを出すってことだろ？」

「そうじゃないの。解決って言っても、その解決じゃなくって、なんていったらいいのかな。問題自体を取り消すっていうのか...」

「よく、わからないよ。」

「そうね。よくわからなくなってきたわ」

「まとまりがつかなくなったから、もうやめよう」

「問題から、目を逸らさないで！！それこそが、あなたの問題なのよ」

「それが答えかい？それなら、もう問題は解決したね。よかった。もう終わろう」

「違う！全然違う！問題は全く解決していない。そうなのよ。問題は、あなたが本来やらなければならないことから目を逸らしてしまうっていうこと。これはあなたの癖といってもいいわね。」

「目を逸らした先に、何が見えるんだろう。」

「そんなこと言ってんじゃないのよ！」

「うん、まあきっと君はそうだろうけどさ、ちょっと、ちょっとだけ考えてみて、今だけ。何かあると思う？」

「うーんと、そうねー。なにか、未知のものかしら、それは」

「そうだろうな。いや、かえって、もう知ってるはずのもの。知っているのに、ずっと忘れていたものかもしれないな。うん、きっとそうだ。」

「忘れていたもの？」

「そうさ。例えば、茶の間と台所の間にかかっている、すだれ。それは毎日見ているものだけど、改めてみると、あれっ、こんなデザインだったっけ？となる。そんな感じのものなんだ、きっと。」

「へえ、そうかしら。」

「そうさ。そのとおりさ」

「じゃ、こんなのはどう？」

「なにさ？」

「時折降って来る雨の音」

「なんで？」

「知ってるはずなのに、いつも新鮮に聞こえるわ。たまにしか聞かないからかな」

「そう？それってなんか素敵だね」

「そう。まるで異国に来たみたいに見えるのよ」

「異国って、フランス？」

「いえ、イタリアだわ」

こうして彼氏は彼女との話題を逸らすのに成功したのだった。

## 第9話 ソロ

---

今度、ソロでデビューするんだ。

そんな言葉で始まった、今回の座談会。テーマは、一人ぼっち一人ぼっちの魅力は？

自分が好きな時に、好きなことができる

お金の使い道が自由

時間の使い方が自由

寂しくない

寂しさを感じない

そんなものは忘れた

などがあげられます

最後の方は、なんだかやけくそですね。

ええ、それでは座談会の様子をご覧ください。

三つ豆など食べながら、三人のソロたちが、話し合いを始めたようです

あのさー、ぼく実は、三人グループなんだけど。一人が話し始めます。

でも、今回三人それぞれがソロで活動することになってー

あ、知ってる。

と、横にいたもう一人が言った。

それで今回ここにきてるんですね。

もう片方の隣にいた男が言った。

そうなんだ。

今まで三人で活動してきたから、正直、どうしていいかわからなくて

そもそも、なんでソロ活動しようと思ったんですか。と、どちらかの隣が言った。

三人の意見が合わなかったんだ。

ほう。と二人

いや、三人の意見が合わなかったんじゃない。正確にいうと、二人の意見は合ってた。俺と、もう一人。そしてあとの一人の意見がどうしても合わなくてね。

じゃあ、もう意見が合った二人でやればいいことじゃないの。別にソロでやる必要はないんじゃない？

いや。だめなんだ。なぜなら、二人の意見は、三人でやることだったから。そして、もうひとりの意見は、二人と一人でやることだったから。

なるほど。だから、どちらでもない結果になったのか。

そうなんだ。と男は肩を落とした。

ところで君はどうなんだい。

私がこの回に参加したのはね、じつは私は双子なんだけども

へえと横の二人がつぶやいた。

これが、写真。よく似てるけど、どこか違うでしょう。

ほんとだ。どこって言えないけど、どこか違う。そっくりだけど。

そう。その違いを見て欲しくて、ソロで活動してみることにしたんだ。

双子の心境ってやつか。

でも、それでは余計ドツボにはまるってことに気づいた。

どうして？

隣にいれば、この写真のように、見比べられる。だけど、一人でいると、記憶の中のもう一人と見比べるしかないから、精度がものすごく低い。もっと間違えられる。知らない人に話しかけられてばかりだ。

間違えられたらどうするの？

もう無視するしかないじゃない。

それって、自分に返ってこない？

そう。結局は、相手の評判が落ちるってことは、自分の評判も落ちるってこと。世間は私たちの見分けがついてないんだから。

きついね、双子って。

でもさ、離れて暮らせば勝手に変わってくるでしょ。そしたら違いも際立ってくるんじゃないのそれを狙っているんだけどね。

ところで君は？

今まで相槌をうつだけだった男がしゃべりだした。

私は今まで、合唱団に所属していたのです。ですが、今年からは、一人で歌うようになりました。

なんでまた。

私はハーモニーを重ねることが好きでした。音と音がぴったり重なる瞬間。それが身の震えるほど好きだったんです。

それじゃ、これからできなくなるじゃない。いいの？

はい。いいんです。もう、それができなくなりました。

どうして？

わかりません。前はできたことが、だんだんできなくなってくるのです。前は、もう一つの歌声を聞いて、それにだんだん寄せて行って、ぴったりとつけることができたんです。それができなくなりました。だからこれからは、一人で歌っていかうと思います。

一人なら、自分が歌う音程がメロディーになりますから。

それでいいのかい？

はい。それでいいのです。

じゃあ、ソロ三人組のみなさーん、そろそろお願いしまーす

遠くの方から声が聞こえた。

じゃ、そろそろ行きますか。

そうですね。

三人は同じチェックのシャツと、同じ緑のスカートと、同じロングブーツを履いて、ギターを持ち、立ち上がった。

「重要だと思うところに、線を引いてみてください」先生がそう言ったので、私は一生懸命、教科書の文字の下に鉛筆で線を引いた。

「ここも重要だ」「あ、ここも」

気づくと私は教科書のすべての文章に下線を引いていた。

あの頃から、私は何も変わっていない。今も、すべてのことが、下線を引きたくなるほど重要な出来事ばかりで、例えば今日の天気は曇りだったのだけど、傘を持って行くか行かないかで悩んでいたら、バスに乗り遅れてしまった。そしてバスに乗り遅れるという大事件を犯した私は、予備のバスに乗り込み、なんとか遅刻だけは免れたのだが、そのせいで、日課の「今日は何事もおこりませんように」というお祈りをする時間がなくなってしまった。

そのせいかわからないが、曇りという予報はニアピンではずれ、小雨が降ってきた。

そして傘をさそうとした瞬間、傘をバスの中に忘れたことに気づいたのだった。

あの時、あんなに迷わずに、さっさと傘を手に取りバスに乗っていたら。

一つの選択が、幸運へ導き、一つの選択が破滅へ導くのなら、その選択は慎重でなければならない。しかし、正しい選択をしたとしても、一瞬の不注意で、破滅の道へと転がり落ちていく。

すべてのことが重要な私にとって、すべての選択は慎重にしなければならず、そしてたとえ正しい選択ができたとしても、決して油断はできないのであった。

今日もたくさんの選択が、私に押し寄せる。

バス会社に電話をするのは、今がいいのか、昼休みがいいのか？

バス会社に確認が取れたとして、いつ傘を取りに行けばいいのか？

帰りにまた雨が降るかもしれないから、昼休みの内に取りに行った方がいいのか、それとも帰りでいいのか。

業者に電話をするときは、だれに電話を掛ければいいのか？A氏かB氏か。

電話をするのは午前がいいのか、午後がいいのか？

もしもいなかったら、またかけ直せばいいのか、伝言を伝えたほうがいいのか。

その答えを選択するたびに、私はすり減っていく。

だからなるべく選択肢を減らすため、私は決まりきった日常を送る。

朝は毎日みそ汁と、ご飯と納豆だけを食って、決まった時間のバスにのり、トイレでお祈りをして、仕事に向かう。信号機には忠実で、車が来ないから赤でも渡るといった選択肢はない。決まっていることは、決まっているままに。それが安心の近道だ。

それでも予期せぬ選択は、ふいにおとずれる。

誰かのお土産が、配られる。

「どれがいいですか〜？」差し出されるお菓子に、私は圧倒される。すべてをよく見て吟味して

、できれば他の誰かが全種類食べて言った感想を聞いてから選びたい。そんな衝動に駆られる。いやしかし、人がおいしいからと言って、自分がおいしいと感じるとは限らない。味覚は人によって違うのだ。もし自分が大嫌いな味だったとしたら

そんなことを考えているうちに、お菓子の種類は一種類に減ってしまう。

「これでいいですね」最後の一つを渡される。

「あ、はい」

こんなことがよくある。

選択に時間をかけすぎて、タイミングを見失うのだ。

会議の席でも会話の席でも、たとえ話題に最適な知識やエピソードを自分が持っていたとしても、これは言うまいか、言うべきか。どのタイミングで言ったらいいのか？そうして迷っているうちに、話題は次へと変わっていきまう。

私は常に、みんなの手前と後ろで生きている。

そんな毎日に、私は疲れてしまった。

私は立ち止まり、横になる。その冷たい地面にぴたりと手をつけて。

目を閉じて息をしていると、色々な出来事が浮かびあがる。さっきした選択の結果を吟味する。あれはあれでよかったのだろうか。それとももう一つの道に行けばよかったのだろうか。同じ出来事を何度も何度も振り返る。そして私は眠れない。眠りたいのに眠れない。

その時、手の甲に激痛が走った。

「いてっ！」

目を開けてみると、ハイヒールを履いた女が、走り去っていく。「あら、ごめん」  
どうやら手を踏まれたらしい。

女は軽やかな足取りで遠くのぼんやりと明るい方へと走っていく。

どうやったら、あんなに軽やかに走れるのだろう。

あの地面と踵の間にある空間で、どうしてもよい事はスキップして生きてゆくのだ。と私は思った。

自分には、到底ハイヒールなんてはけやしない。私はあきらめて、また目をつぶった。

「いてっ！」再び手の甲に衝撃が走った。

今度は何よ。と思い目を開けると、そこには、あの教科書が落ちていた。

どこからか落ちて来て、その角が当たったらしい。

私は寝ころんだまま、その教科書を開いてみる。しわしわになったページの全ての文章の下に、力強く下線が引っ張ってある。

「はは、これじゃ、どこが大事かわかんないよ」

その時私は気づいた。この教科書は、ふりだしに戻ったのだ。

全てが重要という事は、全て重要ではない事と、イコールなのだった。

「そうか」

私は重い体を起こして、立ち上がり、また歩き出した。

少し歩いてから後ろを振り返ってみると、粘土質の地面に私の扁平足の足跡がのっぺりと残っていた。

おわり

私は海岸に、一人でぼうっと立っていた。風が私のズボンをぴったりと脛にくっつけていた。

ヤドカリが声をかけてきた。

「あの、インタビューしてもいいですけど」

私は耳を疑った。別にインタビューをしたいわけでもないし、そんな申請した覚えはなかった。

「あの、ヤドカリくん、ご遠慮します。今はそんな気分じゃないので」

「名前は、かなみといいます。」

「かなみ？」

「はい」

「あの、インタビューするつもりはないんだけど、君は、あー、かなみさんは、いつもここで生活してるのですか？」

「はい。そうです。広く浅いところが大好きだから」

「そう」

「でも、ワタシの又従兄弟は、もっともっと海の深い場所に住んでいるんです」

「そう。ありがとう。これで、インタビューは終わりです」

「こないだ、雪国に、旅行に行ってきたんです」

「あれ、インタビューは終わったのにな」

強引にインタビューを終わらせようとした私だったが、思いのほか、ヤドカリが雪国に旅をした話に、興味をそそられていた。

「それで、どこへ？」

「名前はわかりませんが、とても、雪深いところです」

「ふむふむ」

「私は、雪の上を、スーツケースを引っ張って、歩いていたんです」

ヤドカリのスーツケースってどんなものだろう。と私は思った。

「それで、向かっていたんです」

「どこへ？」

「歌声が聞こえたんです。明かりも見えたんです。だからそこへ」

「特に目的があったわけでもないんですね。それなのに、よく雪国まで行く気になりましたね」

「目的はありました」

「え、そうなんですか？」

「はい。さっき言ったでしょう。ワタシの又従兄弟は深海に住んでいるって。だけどワタシは深海へは行けないのです。だから、又従兄弟にも会ったことがないのです」

「あら、そうだったのですか？」

「そう。だからワタシは又従兄弟に会うために、雪国へ行ったんです」

「あれ、ちょっと待って、話が見えなくなってきたけども、まず、かなみさんの又従兄弟さんは、深海に住んでいるんですよね？」

「はい。そうです」

「だったら、なんで雪国なんかに？」

「さっきも言ったでしょう。ワタシが行ったのは、とても、雪深いところだって。同じ、深いところに行けば、又従兄弟に会えると思って。だって、「深いところで繋がってる」というでしょう？」

ざざんと少し強めの波が来て、ヤドカリの体が一瞬持ち上がり、ゆらゆらっと揺れた。私は少し胸が痛んだ。

「それで、結局、又従兄弟には会えたんですか？」

「それが、ワタシ、ホワイトアウトに遭ってしまって。ヒトの足跡に落ちてしまったんです。それで、そこから抜け出せなくなってしまって」

「ええ、それは大変だ。それで、どうしたんですか？」

「殻に閉じこもりました」

「それがいい」

「それでも寒くて、スーツケースの中味を全部だして、スーツケースの中に入りました」

「それもいい」

「目が覚めたら朝になっていて、スーツケースから出した持ち物が、全部凍っていました」

「それはそうでしょう」

「スーツケースの中に、凍った持ち物を全部しまつて、もう帰ろうと思ったんです。歌も聞こえなくなっていましたし」

「うんうん」

「けれど、ワタシはまだ足跡の穴の中にいることに気づきました」

「あ、そうか」

「ワタシはまた殻の中に閉じこもりました。今度はスーツケースの中に入るのはやめました。もうクーラーボックスみたいになっていたのです」

「それはそうだ」

「そしたら、声が聞こえたんです。今助けてあげるよって」

「え？だれの？」

「それがわからないんです。殻の中にいたのです。ただ、体がふわっと宙に浮いて、殻から出てみると、ワタシの体とクーラーボックスは、穴の外に出ていました」

「ああ、良かった」

「だから、思ったんです。きっとワタシを助けてくれたのは、ワタシの又従兄弟だったんじゃないかと」

「顔は見たの？」

「いいえ。でも見ても、分からないと思います。会ったことがないので」

「そうか」

ざざんとまた波が来て、私はくしゃみを一つした。

「そろそろ、帰ります。インタビューはもうおしまいです」

「そうですか。それでは」

風がひゅうと吹いた。深い話を聞いた。と私は思った。

後日、私は海の奥深くから来たリュウグウノツカイから、こんな話を耳にした。

深海に住むヤドカリが、又従兄弟に会うために、海底火山に登ったと。

たとえ会えなくても、二匹は深いところで繋がっているようだ。

おわり

## 第12話 語調

「あらかじめ、言っておきますが、」

と、司会が話し始めた。

「今日お集りのみなさん、ご存知だと思いますが、みなさま、用意された言葉ではございません。突然降って湧いてくる魂の叫びとでもいいでしょうか。ですので、皆様方が、その目の前にある、ロイター版ですね。それには感情という名のバネがついていますけれども、その板を踏み、そしてその板にあります泉に飛び込む瞬間、その言葉は生まれてくるのでございます。皆様の中に。いえ、先ほど降ってくると言いましたね。ですから、皆さまに課せられた、感情から生まれ出た、各国の言葉です。それを皆様が抱いて、そしてロイター版の勢いそのままに、この泉に飛び込んでいただきたいと思う次第でございます。よろしいですか？ご質問ある方？」

その時、泉の周りを取り囲んでいたロイター版の周りをさらに取り囲んでいた者たちの中の一人が、ジャンプして、ロイター版に飛び込んだ。

「仕方がないでしょ！」そう言いながらだった。その者は、叫びながら、勢いよく泉の中に飛び込んで行った。そしてそれに続くように、その向かい側にいた者が、同じようにロイター版で踏切り、こう叫んだ。「そんなつもりじゃないのに！！」今度は、最初のものよりも、さらに勢いが強かった。

水しぶきがはね、周りを取り囲んでいる者たちの数人にかかった。その中の一人が、軽くロイター版の上でステップを踏み、こういいながら泉の中に飛び込んで行った。「ひどい」

次から次へ、飛び込む者たち。しかしどのロイター版の後ろにも、次の者が控えていて、一人が飛び込むと次の者が前に進み出て、自分の順番を待っている。

ある者は、助走に失敗し、ロイター版に足を引っかけ、体が曲がったまま、泉に落ちて行った。「すき...です、おえ」「かわいそうに」それをみた横の者が、ロイター版を踏まずに、泉の中に足を浸し、そのまま底に沈んで行った。「ここから出て行った者たちは、もうここには戻って来られません。一度出た言葉は、永遠に消えることはないのです。そして、思わず思い切り飛び込んでしまった者は、後悔というブラックホールに吸い込まれます。または、ここに帰ってこようと、必死でジャンプします。けれどももうそれは元の木阿弥。二度と戻ることはできないのです。だからこそ、慎重に、この泉に飛び込まなければならないのです。けれど感情という名のバネは、調節が利きません。せいぜい、飛び込む時間を遅らせるぐらいしかできないのです。いつかはどこかで、このバネを使わなければ。縮んだままのバネは、いつか爆発するのです。」

そう説明する司会の横で、たくさんの者たちが、泉に飛び込んで行った。

「あの、私、ここにずっといてもいいですか？」

司会の裾を引っ張って、小さな声で話すものがあります。

「あれ、あなたは、なぜここに？もうとっくに泉に飛び込んでいるはずでは？」

「言いたいのに言えないのです。みてください」

司会は、裾を引っ張られたまま、あるロイター版の前にたどり着いた。ロイター版のバネは、まっすぐな一本の針金になっていた。

「なんてことだ！こんなのはみたことがない」

「もう、私はジャンプできません」

「では、ジャンプしなくてもいいから、泉に入って行けばいいでしょう。そうしているものたちも、いるはずですよ」

「それが、私には、降りてこないのです。なにも」

「そんなことはないでしょう」

「いいえ。聞こえるのです。私にだって、私が抱いて飛ぶ言葉が。それでも、私はそれを抱いて飛ぶことはできないのです」

「どうしてですか？」

「それは、折れ曲がってしまったからです」

「言葉が？」

「はい」

「みずから、折れ曲がってしまったのです」

「それを持って泉に飛び込んだら…」司会の顔は青ざめました。

「そうです。ですから、この言葉は決して言うてはいけないのです。言うてしまえば、全てがくるってしまいます。すべてがひっくり返ってしまうのです。ですから、言わないように、言えないように、バネが、自分からまっすぐに伸びてしまいました」

「そういうことだったのですね。わかりました。けれど、さぞかしつらいことでしょう。かわいそうに」

「だから、ここにいてもいいですか？」

「いいでしょう。許可します。端に座って、見学しててください」

「はい」

そのものは、泉を取り囲む集団を見つめながら、泉から離れていった。そして遠くから、泉に飛び込む者たちを見つめていた。

「私だって、飛び込みたかった」

その言葉は、宙に舞い、ほこりと混じって、泉に流れて行きました。

泉の水温を測っていた司会の助手は、「あら、少し水温が高いようです」と、司会に報告した。

「大目に見てください」

司会は、泉に飛び込む者たちを細い目で見ながら、そう言った。

## 第13話 風邪

---

とても長く、風邪を引いていたようだ。

そう。何年も

私のオフィスには、花が飾ってある。その花の水を変えるのが、私の唯一の楽しみだった。

私の心の平安は、ふとしたことですぐ、失われてしまう。だから心の平安を保ってられるギリギリのラインが、朝、水を変えている時までだった。ひとたび仕事が始まれば、平安などと言っている場合ではない。生きることに必死で、死ぬことに必死だった。

家に帰っても、平安は戻ってこなかった。

家の中で、私は一人でいたかった。けれども何かが騒がしくて、心は波立ち、眠れなかった。

そして毎日、寝不足だった。

そんなだったから、簡単に、私は風邪を引き込んだ。

のどはいつも痛み、なにをやってもだるかった。

何かのバランスが崩れているようで、がんばっても、がんばっても、何もクリアにはならなかった。

どうしちゃったんだろう。

エレベーターに乗るたびに、私の顔は老けていった。

寒い

寒い

毛布をぴったり体に付けて、私は春を待った。

けれどもあれから何年も、私は風邪を引いたままだ。

治るだろうか、私の体は。暗くて、それでも甘い場所へ。

戻ってゆけるのだろうか。

今、私の症状は、鼻水だけとなっている。

## 第14話 ぴくっと

---

遠くで、旦那様の怒りの声が聞こえる。私はすばやく表に出る。いらっしゃるところは、わかっている。

ウサギ小屋だ。

私は走った。旦那様の下へ。

「ぴよんこ、おお、ぴよんこ」と言って、旦那様はおいおい泣いている。

「旦那様、どうなされましたか？」

「見てわからぬか」

「はい、えーと。そうですね。ウサギが逃げております」

ウサギ小屋の中には、一匹のハエが、プーンと飛んでいるだけで、ウサギのウの字もなかった。

「ウサギだと？」

「あ、はい。ぴよんこ様がお逃げになっておりますね」

「どうしてちゃんと見ていてやらぬのだ」

「すみません。ちょっと目を離したすきに…」と言っても、始終見ていられるわけでもない。

「最後に見たのはいつだ？」

「朝、餌をやりに来た時です」

「やりにきただと？」

「あ、はい。お食事をお持ちした時です」

「食事は何だったのだ」

「キャベツの芯でございます」

「キャベツの芯だと？」

「あ、はい。新キャベツの、特別おいしい部分でございます」

「そうか。なにか不満があったのではあるまいな」

「いえ、おいしそうに召し上がっておいしかったです」

「それなら、なぜ、なぜいなくなったのだ！！」

「それは、わかりかねます」

しかしそれは十分すぎるほどわかっていた。

あのウサギには、放浪癖があるのだ。

これまで、何度も、脱走しては、屋敷の色々な場所で見つかっている。

「何をしている！一刻も早く、ぴよんこを探し出すのだ！」

「は、はい！」私は、屋敷の中をくまなく探した。しかし、いつもは見つかるはずのポイント、例えば、

冷蔵庫の裏とか、洗濯かごの中とか、そんなところに、ウサギはいなかった。

すべてのポイントを探したのだが、みつからない。途方に暮れていると、右目の視界ギリギリのところ、何かがぴくっと動いた気がした。私はスッと無駄のない動きで、右に頭を回した。

けれどそこには、何もない。あるのは、熱帯魚の水槽だけである。

私は頭を元にもどそうとした。しかし、再び、何かが動いた気配がして、それはできなかった。

「何を探してるの？」突然、幼い男の子の声がした。

「坊ちゃん」

水槽の裏から、この家の坊ちゃんが出て来た。

水槽の水は昨日取り替えたばかりで、水は澄んでいた。

さっき、水槽の裏にいたでしょうか？

「いやはや、まったく気づきませんでした」

「もしかして、ウサギ？」

「はい。そうです。どうしてか、鍵をかけても逃げてしまうのですよ」

「それ、なんでか知ってる」

「どうしてなのでしょう？」

「僕が、鍵を開けてるからだよ」そう言って、坊ちゃんはあくびをした。

ははあ、そういうことだったのか。いくら脱走対策をしたところで無駄だったのだ。夜中にこっそりこの坊ちゃんが抜け出して、ウサギ小屋の戸を開けていたのだ。

「悪い、坊ちゃんですね」

「えへへー」

「どうしてそんなことをするのです？」

「ウサギを探すより先に、僕を探してみたら」

そういうなり、坊ちゃんはまた、水槽のうらに隠れた。

今度は、確実に、透明な水槽の裏に、坊ちゃんがいるのが見えた。

「そこにいるのは、分かっていますよ」私は駆け寄り、坊ちゃんを腕に抱いた。

「おお、みつけたか」大きな声が突然したので、私はぴくっと振り向いた。

旦那様が、スリッパの音を響かせながら、近寄ってきた。

「ああ、無事でよかった。ぴよんこよ」

「ぴよんこ？旦那様、こちらは、坊ちゃまですよ」

「なんだと？」

旦那様の眉が、ぴくっと動いた。

「私には息子などおらんが」

「えっ？」

私は腕の中にいる坊ちゃんを見た。

そこには、ふわふわの毛のウサギが丸まっていた。

「ぎゃっ！」

私は思わず、手を離してしまった。

ウサギがぴよんと跳ねていった。

## 第15話 可塑

---

僕は一人、海辺でギターを弾いていた。

ほんとうなら、今日来るはずだった親友が、あたかも隣に座っているように、僕は感じていた。

親友は、急な用事で来られなくなったと言っていた。

今日話そうと思っていた話が、できなくなってしまった。

たりらんとギターを鳴らし、僕は歌い始めた。

♪「ぼくは、せつない～

きみがいなくなってしまったことを

かんじるから～

きみは～

かわってしまった～

理由はわかってる～

恋は～

きみをうばって～

ぼくら～のせいしゅんを～

そして～気づいてしまった～

今が永遠じゃないことを～

きみは～

おしえてくれた～

ぼくの～ふるさとを～

ぼくの～こころのふるさ～と～

それ～は～

きみ～」

その時後ろで、声がした。

「なにその歌」

親友だった。

「え、聞いてたのかよ」

「うん。なに、今の歌」

「え、ちょっと感傷に浸って」

「ださ」

そういつて、親友は笑いながら僕の横に座った。

「じゃあ、本とのやつ、歌うから。今から」

僕は今度こそ本気になった。

今までののは前座だ。

潮っ気を含んだメロディーが風になびいた。

♪「きみは～、変わってしまった～

恋を～して～」

「さっきと変わんないじゃんかよ」

♪「まあ～、聞いて～  
どこが変わったのかを～」  
「聞いてやるよ」  
♪「スケートリンクに～うっすらつもった雪の上～  
そりで滑ってるみたいに～  
ぼくも～まね～して～車をすりぬけた～」  
「車をすり抜けたってどういうことよ？」  
♪「助手席から入って～運転席から出た～」  
「轢かれるぞ」  
♪「きみは～変わってしまった～  
もう戻らない～  
二度と～もとには～もどらない～」  
♪「ぼくは～悲しくて～左手が動かな～い  
一時的に～」  
「今ギター弾いてるだろ」  
♪「左手で弾いてるように～見えるけど～  
実はこれは～  
発達した～左足～」  
「気づかなかったわ」

じゃじゃーん

と鳴らして、僕の楽曲は終了した。

「どうだった？」  
「変だった」  
「そう。それなら、良かった」  
「話したかった話って、何？」

♪「もう言った～  
すっきりした～」

「なんなんだよ」

親友は、笑って、隣に寝転んだ。

僕もギターを抱いたまま、その隣に寝転んだ。その時、不意に気づいた。

「あれ、そういえば、話したいことがあるって、僕言ってたっけ？」そのことは、歌詞にしていないはずだった。

♪「言っていないけど～  
うしろ頭に～  
書いていた～」

やっぱり親友だ。

と僕は思った。

## 第16話 見事

---

「よっ、お見事！」

と、となりの太ったおじさんが言った。そのおじさんは、数分前に出会ったばかりで、名前も、どんなところで働いているのかも、趣味趣向も何も知らなかった。そのおじさんだけじゃない。目の前に座っている髪の長い女性も、その隣のみつあみの女の子も、そのまたとなりの男子高校生も、僕にはまったくの他人と言ってもいいようなものだった。しかし、ここに、わずか1メートル四方のテーブルを囲んで、僕たちは、なにかとてつもなく深い絆を、もっているようだった。

数分前、僕は砂利道を歩いていた。今時砂利道なんて珍しいな。と思いながら歩いていた。足の裏は、妙に痛くて、底の薄いボロボロのスニーカーを履いていたことを悔やんだ。

どうしてこんなに痛いのか、その正体を見るべく、僕は下を向きながら歩いた。

そして気づいたのだ。そのマッチに。

一本のマッチが、大きな石ころの隙間に、丁寧に置かれていた。落としたのではないと感じたのは、それがまだ使っていないマッチだったからで、それに、なんだかそんな気がしたからだった。

「マッチも、最近見ないな〜」妙な懐かしさを覚えて、僕はそれを拾った。その瞬間だった。

「はい、こちらへどうぞ〜」

「え？」

僕が顔を上げると、目の前に、小さな白い建物が建っていた。

そしてその横には、ピエロのような恰好をした変な人が立っていた。みるからに怪しげだ。

「さ、こちらへどうぞ〜」

しきりに手を突如現れたこれまた怪しげな建物のほうへのぼして、僕を誘導しようとしている。

「あ、あの〜、いいです。急いでるんで」

「そんなこと言わず、これを見逃したら、あなた一生、いや、死んでからも後悔しますよ」

「そんなものには騙されませんよ」

「でも、せっかくチケットを持っているのにあなたは。これは何万分の一のチャンスを手にした人にしか見られないんですよ」

「チケット？」

「はい、それです。今手にお持ちの」

「え、これ？」

「はい、さようです」

僕は手の中のマッチ棒を見た。こんなの拾わなければよかった。そうすれば、こんな変な勧誘に声をかけられることもなかったのに。

「あ、こんなのだれかに譲ります」

「ええ！いいんですか？絶対に見るべきだと思いますけどねえ、私は」

「それでは、そのチケットは私にお譲りいただくということで。」

「え、あなたに？」

「はい、さようです」

「やっぱりちょっと見てみようかな」

「そうでしょう、そうでしょうとも。絶対にその方がいいですよ」

僕はおそろおそろ促されるまま、その白い建物の扉に手をかけた。

ドアノブがひんやりと冷たかった。

扉から入ると、一人のおじさんが立っていた。これが、後に「よっ、お見事！」と叫ぶおじさんである。おじさんは、右手でマッチ棒を一本つまんでいた。

「なんだってこんなところに、あれ、君もマッチ持っているの？」おじさんは気さくに話しかけてきた。

「はあ」

「さっき砂利道を歩いてたら、これが落ちてて、なんだか懐かしくて拾っちゃいました。

「そう、じつは俺もね、さっき道で拾ったのよ。まだ使ってないからもったいないと思ってさあ」

「それ、砂利道でしたか？」

「いや。普通のコンクリだな」

僕は部屋の中を見回してみた。白い壁に白い天井。そして扉は、自分が入って来た扉だけだった。

「変だな……」

僕は思わず壁に手をついた。何がなんだかわけがわからない。白い壁は、すこしざらざらしていた。

その時、キィと音がして、長い髪の女が入って来た。

「あの、ここ、なんなんでしょう？」

入ってくるなり、不安そうに女の人が聞いて来た。

「いやー、僕たちもよくわからなくて」

それを言うか言わないかのところで、僕はその女の人もマッチを持っていることに気づいた。

「それ、どこで拾ったんですか？」と僕はすかさず聞いた。

「あ、拾ったってわかっちゃいます？今海にいたんですけど、砂の中に埋もれてるのを見つけて。綺麗な砂浜だったから、ごみが落ちてちゃいけないと思って拾ったんですけど」

「砂浜からここに来たんですか？」

「はい」

僕がいた砂利道のある場所は、内陸で、海へ行くには車で一時間も走らなければならなかった。

なんなんだここは

僕はなんだか怖くなってきた。帰ろう。

僕は扉へ向かって走った。すると、バンッと向こうから扉が開いて、そこからみつあみの女の子が元気よく出て来た。

やはり、手にはマッチを持っている。

「すごいものってなに？」

女の子は、興味津々の目で、僕を見て聞いた。

「それはこれから始まるみたい。それより君、どこから来たの？」

「うーん、わかんない」

「わかんない？」

まあ、五才くらいだから無理もないかと僕は思った。

「これ、何かわかる？」

と、女の子はマッチを差し出して聞いた。

「マッチも知らないのか？」とおじさんが言った。

「知らない。見たことない」と女の子が言った。

「そうか、これはな……」とおじさんが説明に入ったところで、扉から男子高校生が入って来た。

「あなたは、どこでそれを拾ったの？」と髪の長い女の人が聞いた。

「学校の帰り道に、ふと見つけて。これ、マッチですよ。絵本で見たことある」

「まあ、正解だな」とおじさんが言った。

その時、上の方から声が聞こえた。

「みなさ～ん、おそろいですね！それでは、これから、キャンプファイヤーを始めます。皆さん、楽しんでくださいね～」

「キャンプファイヤーだって？」

おじさんが息巻いた。

「こんな室内で、やれるわけねえじゃねえかよ。俺は帰る！」

大股でおじさんは歩いて、外へ出ようとした。しかし、そこにはもう扉はなかった。

おじさんは青い顔で振り向いた。

そこには、なくなった扉の代わりに、白いテーブルが現れていた。

僕もびっくりした。おじさんを目で追っているうちに、瞬時に音もなく、そのテーブルは現れたのだった。

「まず、キャンプファイヤーしてみましょう」落ち着いた声で、髪の長い女の人が言った。

「これが出て来たってということは、ここでやれってことなんじゃないかしら」

「そうですね。なんだか燃えない素材みたいだし」僕はもうどうにでもなれという感じで、冷たいテーブルをコンコンと叩いた。

「どうやってやるのー？」とみつあみの女の子が聞いた。

「うーん」と、みんなは一瞬考え込んだ。

「あ、これですよ、これ」男子高校生が、自分のマッチを指さして言った。

「マッチ？」と僕は言った。

「これを薪の代わりにして、燃やせばいいんじゃないですか？」

「なるほど」と僕は言った。

「はんっ、ずいぶんちっせえキャンプファイヤーだな」とおじさんが言った。

「やるー、やるー、キャンプハイヤー」

「キャンプハイヤーじゃねえ、ファイヤーだファイヤー」

そして僕たちは、白いテーブルの周りに集まり、一本ずつ自分のマッチを置いていった。

まず、おじさんが一本のマッチを置き、そのマッチに平行になるように僕のマッチを置いた。そして今度はそのマッチの上に、垂直になるように、長い髪の女の人のマッチが置かれた。そしてそれに平行になるように、みつあみの女の子のマッチが置かれた。そしてその上に、僕のマッチの真上に来るように、男子高校生のマッチが置かれた。

「よし、これでできた。あとは、これに火をつけるだけです。ライターか何か持ってる方いますか？」と男子高校生が言った。

「今度は不正解だな」とおじさんが言った。

「マッチはな、火をつけるための道具なのよ。火をつける道具に火をつける道具探してどうすんだよ」

「あ、そうでした」

おじさんは、男子高校生が最後に置いたマッチを手にとると、白い壁にさっと擦って、マッチに火をつけた。そして、僕らのキャンプファイヤーに火をつけた。

ポッと、おじさんは全てのマッチに火をつけて、最後に手持ちのマッチを真ん中に投げ入れた。そしてマッチはめらめらと燃え始めた。こんなオレンジ色の火を見たのは、久しぶりだった。

そのオレンジが、木枠の中で、だんだん塊になって来た。五本のマッチだけで、こんなに長い時間燃え続けるだろうか？と僕は思いながら見つめ続けた。

塊はだんだん大きくなり、手のこぶし大位になった。

そして突然、ひゅーと音がして、白い天井をぶち抜き、その塊は飛び出していった。

「よっ、お見事！」と、ここでおじさんが言った。

天井からオレンジの塊が出て行ったあと、僕たちはぼーっと穴の開いた天井と、黒くくすぶっている五本のマッチを見ていた。

「ありがとうございます。これにて、キャンプファイヤーをお開きにしたいと思います。皆さまお気をつけておかえりください。また、お帰りの際には、入って来た順から、お一人ずつ退室願います。それでない、お家に帰れなくなりますよ〜」

おじさんが、扉へ向かった。いつのまにか、また扉ができていた。おじさんは、最後に振り向いて、「じゃあな」と言った。「また」と僕は言った。

そして次は僕の番だった。なんだか名残惜しい気もしたけれど、さっぱりした気もしていた。

「それじゃ、さようなら」

「ばいばーい」と、女の子が手を振ってくれた。

ばたんと扉が閉まった。後のことは知らない。

空は、オレンジ色の夕焼けだった。その時僕は気づいた。

あ、僕たちは、夕日の色を作ったんだ。

帰り道は、夕日に見とれて、足の痛みどころじゃなかった。

終わり

## 第17話 いつも

---

「いつも一緒にいてね」

と、その人は言った。けれど、僕はいつも一緒にいたいとは思わない。だって、一人の時間も大切じゃないか。それに、その人は、超うざいのだ。

「こんなこと言いたくないけどさー、」

この枕詞から始まり、その人の話は延々と続いて行く。そう。完成前のそうめんのように。

「本当は、言いたくて、しょうがないんだよね？そうでしょう」ということばを、僕は必死で飲み込む。

「そろそろ、行かなきゃ。アイスが溶けるし……」僕はそう言って、その人から離れようとする。

「アイス？私も食べたーい」そう言ってその人は、僕に憑いてくる。いつもいつも。

僕は本当は一人で食べたかったアイスを、二つに分ける。

「どうぞ」

「ありがとー」

その人は、おいしそうにそれを食べる。ふりをする。

と、いうのも、食べる隙間もなく、ずーっとしゃべっているからだ。結局、アイスはでろでろに溶けてしまう。

あーあ、楽しみにしていたアイスだったのに。

そろそろ、歯を磨かなきゃ。

そう僕が言うと、

「あ、っそう。もうそんな時間？私も磨こうっと」

そうって、その人は、洗面所までついてくる。

「うーしみる」と僕が知覚過敏の痛みを訴えても、そんなのお構いなしに、その人は僕の隣でしゃべっている。僕は鏡を見ながら、歯を磨き続ける。音ではなく、目の前に広がる鏡面に集中する。そこでは、あたかも僕は一人でいて、一人で歯を磨いているように見える。

隣では、歯も磨かずに、腕組みをして、その人が話し続けている。よくもまあ、飽きないものだ。

僕はうんざりして、うがいを思いっきり声を出しながらする。

そんなことなど気にもしないで、その人はしゃべりつづける。

僕はもう話の中味など気にしていない。もう何度も同じ話をしている。自分が死んだ日のこと。

「こんなこと言いたくないけどさー、私ってホントどじなのよ。自分から落とし穴に落ちちゃってさー、ま、ほんとのところ、恥ずかしくて、穴でもあったら入りたいって思ってたからちょうどよかったんだけど、でもその穴から一生抜け出せないままだとは思わなかったわよねー。それなら、恥ずかしい思いしてみんなのさらし者になっての方が、まだましだったよ」

彼女の良いところは、人の悪口を決して言わないことだ。いつも自分ばかり責めている。それが多少うざくもあるのだが。

「じゃ、もう寝るよ」

「ほんと！じゃあ、私も寝る！」

僕の背後霊が、スーっと布団にもぐり込んでくる。ぞわぞわっと寒気がして、一瞬僕は身震いする。

「ま、夏だから涼しくていいか」

僕は静かに眠りにつく

おわり



## 第18話 始まる

---

この日は、雨が降っていた。

外は暗く、雨の音が私を読書に集中させてくれていた。

物語は佳境に入っていた。

本のページの片隅に、しずくがポトッと落ちた。

私は目の端を拭った。

しかし、私の目は、カラカラに乾いていた。むしろ、ドライアイ気味であった。

「あ、涙じゃなかったのか」

私はしずくの根源を求めて、上を見上げた。

そこには、見事な雨漏り現場があった。

私はとりあえず、隣にあったマグカップをその下に置いた。しかし、水は跳ね返り、畳に飛び散った。

ここで、桶でも鍋でもあればよいのだが、あいにく家には風呂もないし、台所もなかった。

どうするか。

このまま、ただ水が落ちていくのを眺めているしかないのだろうか。

私は、玄関に使い古した靴があるのを思い出した。

ああ、あれなら。

私はその古びた靴を取って来た。片方は底がはがれかけていたので、もう片方を水の落下地点に置いた。

思ったとおり、布製の靴は、ぽとんとおちた雨を吸い込んでくれた。

雨はどんどん落ちた。

私は雨が靴に吸い込まれる様子を、じっとみていた。

物語の佳境は、声を奪われたまま、畳の上に捨て置かれていた。

そのうち、靴の中の水分は飽和点に達した。

その瞬間、「あっ」と私は思った。

靴が、一瞬宙に浮き、そばにあったもう片方の靴と共に、すたすと歩きだしたのだ。

まるで透明人間が歩いているように。

私はあっけにとられて見ていた。

そのうち、立て付けの悪い玄関の扉をキィと開け、靴たちは家を出て行った。

その先に、何があるのだろう。

わからないが、靴たちの第二の人生が、今始まった。

## 第19話 歯釜

---

沈んだ夜にぼくはひとり、ごはんが突然食べたくなくなった。

昼ごはん、夜ごはんといった漠然としたごはんではなく、お米が食べたくなくなったのだった。

ぼくは薄手のジャンパーをはおり、コンビニへと出かけて行った。

びいんぽおん

と、いつもとは違う音がした。

見慣れない男の店員さんが、レジのところ立っていて、どこかの旅館の女将のように、手を前に合わせ、ぴしっと立っていた。

ぼくはおにぎり売り場に直行した。

おにぎり売り場は、レジの目の前にある。当然、ぼくは、先ほどの女将店員に、じっと見られることとなる。

視線を感じるが、ぼくはおにぎり選びに集中する。

「たらこにしようか、それとも明太子にしようか……」これはぼくの心の声だ。

すると、ガン無視してきた左側から、「おいしいですよ」と声がかかった。

ぼくはしかたなしに、愛想笑いを返す。

「あ、そうなんですね」

「はい。はがまで炊いてますから」そう言って、女将店員は、お辞儀をした。

「へー、めずらしいですね」

このコンビニは、いつも来ているが、そんなに特別おいしいと感じたことはなかった。

なので、適当に合わせる。

ぼくは結局、たらこを手に取り、レジに出した。

「ご一緒に、あたたかいお茶はいかがですか」と店員は透き通る声で言った。

その声がものすごく透き通っていたので、ぼくは、「あ、じゃあ、それも」と言った。

「おにぎりいって～ん、おちゃいって～ん」

こんな掛け声だったかなあとと思いながら、ぼくは千円札を取り出した。

「こちら、おにぎりとお茶をお買い上げのお客様に、シャボン玉をプレゼントしております」

え、めずらしいな。そしてなんの脈絡もなく、シャボン玉なんだ。とぼくは思った。きっと、在庫が余っているのだろう。

「ありがとうございます」

ぼくは店を出た。

少し寒かったが、シャボン玉も試したかったので、ぼくは公園に行った。ブランコにはだれも乗っていなかった。いつもは子どもが取り合っているのに。と思いながら、ぼくは高い方のブランコに座る。

ペリペリとフィルムを剥がして、のりを巻く段で、ぼくは「ん？」と思った。

外灯の明かりだけで確かではないのだが、なにやらおこげのようなものが見える。

「まじで、はがまで炊いたんだ……」

のりを巻き終え、ぼくはたまらずおにぎりをほおぼる。

たらこがごはんと共に口の中に広がる。

「うまい」

なんだろうこの食感だけでもわかるつやつや感は。

こんなにこのおにぎりはおいしかったらどうか。

一気に食べ終えてから、ぼくはお茶をすすった。

は一と息をすると、もう白い息だった。

「うまかったなー」

その余韻にひたりながら、ぼくはシャボン玉をした。

外灯に照らされるシャボン玉はとても綺麗だ。

闇の向こうにシャボン玉は吸い込まれていく。

るるるるーる

るるるるーる

と、どこかで歌声が聞こえる。なんとなくさっきの店員の透き通った声のような気がする。

バイトの時間が終わったのだろうか。

名札を見ておけばよかった、と思った瞬間、どうでもいいやと思った。

ぼくは特別大きなシャボン玉を作り、白い息では一と夜空におしやった。

ちょっとさっきのたらこの香りがした。

## 第20話 版

---

私は透明な板に挟まれていた。身動きは取れなかった。透明な板なので、向こうが見えるはずだった。しかし、透明な板の向こうはぼんやりと白くぼやけていて、なにがあるのやら、分からない状態だった。

身動きが取れないことに、不思議と窮屈さは感じなかった。ただそこにいる安心感。それだけがあった。

しばらくそうしていると、顔と板の間に、少し隙間があることがわかった。私は、少し顔を引いた。そうすると、板に映った自分の顔が見えた。試しに、私はニッと笑ってみた。すると、2.5秒後くらいに、板に映った顔もニッと笑ったのだ。なんなんだ、このタイムラグは。

これは、鏡ではない。と私は自分に言い聞かせた。これは鏡ではないから、笑った後、すぐに、ニッとしないのだ。では、これはなんなんだろう。影だろうか。いや、影は輪郭を映すだけ。あんなにニッとほしくない。

眉間にグッとしわがよった。その2.5秒後、目の前の顔の目の上の眉間に、グッとしわがよった。そのとたん、眉間のしわを中心として、顔全体、体全体へとしわがどんどん広がっていった。

やがて一枚の紙が丸まるように、その像はくしゃくしゃと消えて行った。

目の前には、もう何も映ってはいなかった。

またゴーンと鐘が鳴った。またと思ったが、初めて聞いた音だった。ここにいることを許されるような響き、心地よい響き。

透明な板に映っていた自分が持って行ったもの。うつしていった自分の嫌な部分。しわしわになって、全部きれいに消えてしまった。今いる私は、完璧な状態だった。さあ、もう少しだ。もう少し、ここにしよう。そして私はまた、目を閉じた。また、と思ったが、ここで目を閉じたのは、瞬き以外で初めてのことだった。どこまでも続く透明な板の中で、私は永遠の眠りについた。

その2.5秒後、どこかで大学生の男の子が、くしゃくしゃに丸まった大学ノートのをきれっぱしを拾った。大学生が、大学ノートを広げると、そこには、ニッと笑いながらグッと眉間にしわをよせた人物がかたどられていた。

## 第21話 本決まり

---

雲と、太陽と、市長が、会議を開いていた。

「昨日も降りましたなあ」と、市長が口を開いた。

「そうですね。それは、今日の午後には太陽さんに溶かしてもらって」と雲は言った。

「はい、もちろんです。まだまだ早いですからね」と太陽が朗らかに言った。

「けっこう。まだタイヤの交換をしてないんでね、私。それで、いつになります？」市長が身を乗り出した。

「そうですね。先日の会議では、20日前後でどうかというところで終わっていたのですが」と雲が、資料をパラパラとめくりながら言った。「でも今年は寒いですからね～」と太陽が椅子にもたれながら言った。

「少し早めに、19日では？」と市長が提案した。

「でも、昨日も苦情が来てましてね」雲が顔を曇らせて言った。

「苦情？どんな？」と太陽がブワッと音をたてさせながら、雲の方を向いた。

「まあ、雪がとけるのは喜ばしいことなんだけれども、こう寒くなってくると、溶けた雪が夜には凍って、つるつるになります。それで転んで足を折ってしまったという内容でした」

「何件くらい？」と市長も真剣な面持ちで聞いた。

「一件です」

「あ、たった一件ですか？」苦情に慣れ過ぎている市長は驚いた。

「ま、私たちの連絡先を知っている人は少ないですからね」と雲は落ち着き払って言った。

「あ、もくもくラインですか？」と市長はうれしげに言った。

「ええ、そうです」と雲は冷徹に言い「なので、少し例年より早めにしてもいいかと」と話を本題に戻した。

「じゃあ、17日でどうです？ちょうど日取りもよいことですし」と太陽が鼻くそをほじりながら言った。

「日取りが良いとは？」と雲がすかさず聞き返した。

「7のつく日は、なんだかいいことが起きるんです。私」

「それは、あなただけのことでは？」

「まあ、まあ、でもいいじゃありませんか、17日で。それならタイヤ交換も十分に間に合う」

「わかりました。では、17日ということで決定ですね。その日から、私どっと降らせますから。太陽さん、あんまり頑張りすぎないようにお願いしますよ」

「ほ～い」

「それでは、会議はこれで終了ですな」

こうして、本年の根雪になる日が決定したのだった。

## 第22話 回る

---

私はさっき、タクシーから観覧車に乗り換えた。こちらの方が、目的地に早く着きそうだったからだ。

私はさっき、タクシーの中で、何かを検索しようとしていた。そこまではよかった。しかし、何かを検索しようとしたのを忘れて、何かを検索しようとしたのかを検索しようとしている自分に気づいたのだ。

私はスーツ姿のまま、慌てて観覧車に乗り換えた。

観覧車がガタンと音をたてて動き出した。思ったより揺れるみたいだ。

風の音は、上に行くにつれ、強くなった。

ごうーごうーと風が鳴り響く中、私は盛大にくしゃみをした。

いつもは恥ずかしいので、口を閉じ、押し殺すようにくしゃみをしていた。

けれどここは上空の密室だ。

上空の密室なんて、飛行機のトイレと、ここぐらいのものだ。

贅沢な時間だ。と私は思いながら外を見た。

もう景色はオレンジ色に染まっていた。

何かを検索しようとしていたのか、私は思い出した。

回転木馬と観覧車、どちらの方が回転速度が速いのかだった。

「ありがとうございました～」と言いながら

係員の人が、さっさと私が乗っていた観覧車の中をほうきで掃いていた。

## 第23話 過剰

---

ぼくは、毎日眠れなくて困っていた。そこで、眠りの国から、眠りのスペシャリストを招き、眠る訓練を受けることにした。

「お願いします。先生」

「ええっ！先生なんて、今まで呼ばれたことなかった！」

「だって、先生は、眠りのスペシャリストなんでしょう？」

「そうはいつでも、私の国では、眠ることなどしごく簡単なこと。それに、私はスペシャリストと言っても、誰よりも長く、誰よりも早く眠れるだけのこと。あなたに教えてあげられることがあるかどうかわかりかねます」

失敗したかなあとぼくは思った。けれど、高いお金を払って来てもらったのだから、この機会を無駄にするわけにはいかない。少しでも眠りの極意を知って、質のよい睡眠を手に入れなければならない。そうでないと、ぼくはもうお肌がボロボロだし、頭もボロボロだし、ぞうきんもボロボロだったのだ。

「まずは、なにをすればいいですか？」

「そ、そうですね。まずは、靴下を脱ぐところからはじめましょうか」

「あ、はい。そうですね」

ぼくは、紫色の靴下を脱いだ。

「それから、パジャマに着替えることです。パジャマとは言っても、パジャマ用に作られたパジャマじゃなくてもいいんです。あなたにとって、一番気楽で、一番心許せる服を着てください。」

「一番気を許せる服ですか」

ぼくは、小学生の時から着ている、Tシャツを取り出した。

「これでいいんですか？」

「あ、この首周りのよれよれ感、いいですね。素敵です」

下は、普通のパジャマにすることにした。ぼくはさっと着替えると、その次の指示を待った。

「次は、何をすればいいですか？先生」

先生を見ると、もう先生も、お気に入りのナイトウェアを着用していた。全身ピンク色の、パジャマらしいパジャマだった。

「先生は、パジャマなんですね」

「いけませんか？！すみません！私、先日これを購入しまして、とても気に入ってしまったものですから」

中年のおじさんが、ピンクのパジャマを着用しているというのに、なぜか異様に似合っていた。

「いえ、すごく似合ってます」

「あは、そうですか」

「じゃあ、次はどうするんですか？」

「はい。次は、一緒に眠るぬいぐるみを選びます。」

「ぬいぐるみですか？枕や、シーツではなく？」

ぬいぐるみと寝たことなど、今までの人生で一度もない。

「これは、非常に重要です。あなたのぬいぐるみを、まず見せてください」

「あの、ぼくぬいぐるみは一個も持ってないんですけど」

「そんな！！！」

そう言ったまま、先生は、しばし打ちひしがれていた。

「でかけましょう」

「え？」

「いまから、お気に入りのぬいぐるみを、選びに行きましょう！」

「え？もうパジャマに着替えちゃったんですけど！？」

「上からコートを羽織れば、大丈夫です。さ、早く！」

言われるがまま、ぼくと先生はコートを羽織り、外へ飛び出した。

ぬるい風が、パジャマの裾からすうーっと入ってくる。

「先生、どこへ行くんですか？」

「行けば、わかります」

そうしてぼくらは、ゲームセンターについた。

そして先生は、クレーンゲーム機のガラスに張り付いた。

「さ、どれにします？かわいいぬいぐるみが、待ってますよ」

「どれにしますといわれても」

「どれにピンとききますか？」

「えーっと……」

じゃあこれ、と指さしたのは、なんてこともないぬいぐるみだった。

「えー、それにするのですか？こっちじゃなくていいんですか？」

先生が指さしたのは、得体のしれない古代魚のぬいぐるみだった。

「いえ、絶対こっちです」

ぼくは先生に流される前に、コインをゲーム機に投入した。

ギーギーと言って、クレーンはぎこちなく動き出した。ボタンを離す前に、クレーンがストップした気がした。ゆっくりとクレーンが手を広げ、ぼくの選んだねこのぬいぐるみの頭をかすった。けれどかすっただけだったので、クレーンは手持ちぶさたのまま、定位置に帰っていった。

「やっぱり、だめですね。お店で買った方が安くすみますよ。おもちゃ屋さん行きましょう」

「わかってないですね。クレーンゲームは、一回で取るものではないのです。何回も時間をかけて、少しずつづらして行って取るのが基本ですよ。まだ一回目ではないですか。さあ、二回目は、もう少し頭を手前にずらしてください」

自腹なのにも思いながらも、ぼくはまたコインを投入した。チャリンという音が、せつなかった。

結局18回やって、ぼくはようやくねこのぬいぐるみを手に入れた。絶対に、普通に買った方が安かった。けれど先生は、そんなことはお構いなしに、ぼくのことをほめたたえた。

「すばらしいですよ。すばらしい。これこそ、あなたが選んだ、あなたのためのぬいぐるみです」

帰り道は、先生は小走りになっていた。ピンクのパジャマの裾がひらひらとたなびくのを見ながら、ぼくも小走りで、先生のあとについて家に帰った。

家につくと、先生は息を切らしていた。

「水を、一杯もらえませんか」

ぼくは先生に水道水をあげた。

「あなたも飲みなさい。睡眠中は、汗をかくんですからね」

「はい」

ちょっと塩素臭い味がした。

「さあ、では、寝ますか」

やっと本題の眠る学習タイムが来た。とぼくは思った。

「先生、コツはなんですか？」

「え、コツ?!」

「それは、布団に入ってからお教えしましょう」

あきらかに動揺しながら先生は言った。

布団に入ると、先生が電気を消してくれた。

「さあ、おやすみなさい。ミーミーちゃんとともに」

勝手に命名されたねこのぬいぐるみを布団の中に一緒に入れられ、ぼくは目を閉じた。

いつもならここから、何時間もの眠れない苦しいときがおとずれる。

しかし今日は違っていた。

すーすーと先生の寝息が聞こえて来た。

「え?!もう寝たんですか?」

ぼくは慌てて飛び起きた。豆電球の明かりのもとでタオルケットをかぶった先生が、静かに寝息をたてていた。  
「はやっ」

「これからいろいろ教えてくれるんじゃないのかよ」

結局先生からは、パジャマの選び方と、一緒に眠るぬいぐるみの選び方しか教わっていなかった。

ま、いいか。

さっき小走りしたので、ちょっと疲れていた。ぼくはまた目を閉じた。

そこからは記憶がない。目を開けると、きれいに畳まれたタオルケットの上に、「講習代として」と書かれた領収書が置かれていた。

## 第24話 あける

この冬は、なんだか調子が悪かった。ずっと風邪を引いていて、いつも寒気がしていた。

今日もいつもの病院に行こうと、私はバスに乗り込んだ。

熱はないけれど、喉がヒリヒリしていた。閉まった窓からでも、冷気がひんやりと伝わって来て、私は思わずカーテンを開けた。少し眠ったあと、目を覚ました。そろそろ降りるバス停に近づく頃だろう。

私はカーテンを少しだけ開けた。そして、息を飲んだ。飲んだとたん、鈍い痛みが喉に走った。

さっきまでの雪景色が一変して、道路の脇には春の緑が広がっていたのだ。

こんな緑をたくさん見たのは、久しぶりだ。

一気にこんなにとけるはずもないし、それにこの道路は、まったく見たことのない道だった。

もしかして、違うバスに乗ったのだろうかと思いは思い、改めて、バスの行先表示を見てみた。しかしそこには、「知らぬが仏」とだけ書かれてあった。そんな名前前のバス停などあるだろうか。これはおかしいと思いは思った。周りの人に聞こうと、私は背筋を伸ばし、辺りを見回した。しかし、誰も乗っていない。それでは運転手に聞こうと、私は席を立とうとした。するとすかさず「危険ですので、バスが止まるまでお立ちにならないでください」と放送が入った。私はまた、ごくんと唾をのみ込んだ。喉の痛みがさらに増している。私は声を振り絞り、「あの、このバス、どこ行きですか？間違えちゃったみたいで」と、その場で聞いてみた。しかし、バスの運転手は何も答えてはくれなかった。運転中は話しかけないでくださいと、怒ってさえもくれなかった。

とりあえず、落ち着こう。と私は思った。カバンからのど飴を取り出すと、それを口に入れた。スーッとするカリンの味が、喉に染み渡った。もう一度、カーテンを開ける勇気が湧いた。そっとカーテンをあけると、相変わらず緑の中の一本道を、バスは走っていた。しかもさっきよりスピードが増しているようだ。ぐんぐんぐんぐんと緑が過ぎていき、目でも負えないほどだった。

バスは、トンネルに近づいていた。そして、トンネルの手前には、誰か人が立っていた。その人の隣を横切る時、私は「あ」と思った。それは知っている顔だった。もう15年以上会っていない人だ。

懐かしいな。と私はその人に手を振った。その人も手を振り返してくれたかもしれないが、バスはすぐトンネルに入ってしまった。その人はあっという間に見えなくなってしまった。

「あ～あ。バスじゃなかったら、止まってお話しできたのに」

と私はつぶやいた。ハッとして、運転手の方を見ると、何も聞こえなかったかのように運転手は運転に集中していた。

それにしてもこのトンネルはいつまで続くのだろう。

トンネルに入ってから、しばらく経っている。

トンネルの壁に、「あと何キロ」という表示がないか、さっきから私はカーテンのすき間から外を覗いていた。

しかし、そのような看板は何もないし、オレンジの光だけが不気味にトンネルの壁を照らしているだけだった。一体、どのくらい時が経ったのだろうか。もしバスを間違えていなければ、とっくの昔に病院について、診察しているころだろう。しかしバスは止まる気配を見せない。

「すみません、次のバス停までどの位ですか？」と私はもう一度勇気を振り絞って尋ねた。しかし、思った通り、返事は来なかった。このままでは、違う県まで行ってしまいそうだ。

私はため息をついた。もうだいぶ来てしまったけれど、ここで降りて、歩いて帰った方がいいのではないかな。そうすれば、あの人にも会えるし。私はそう思った。

「すみません、ここで降りてもらえませんか」

しかし、返事はなかった。

バス停以外のところでは、降りてもらえないきまりでもあるのだろう。

私はしかたなく、また席に落ち着いた。

ふうーっとため息をつく。そしてもう一度、カーテンのすき間を開けてみた。

すると、そこにはお花畑が広がっていた。黄色い花たちが、わんわん咲いている。

いつの間にトンネルを抜けたのだろう。

わあー

と私は思わずさっきと違ったため息をついた。

ブーとその時突然音がした。

へ？だれか降車ボタンを押したの？そう思って、私はもう一度後ろを振り向いてみる。  
するとそこには、男の子が座っていた。  
眠そうな目をしている。

そうか、私の他にも乗っている人がいたんだ。  
「次は～病院前止まります」

それは、私が降りようと思っていたバス停の名前だった。  
「降りなきゃ」

私は慌てて、カーテンを元に戻そうと、全開にした。  
驚いたことに、そこは元の雪景色に戻っていた。

「～病院前～病院前」  
バスはゆっくりとバス停に停まった。  
男の子がさっと私の横を通り過ぎ、バスを降りて行った。  
それを見て、私も慌てて席を立った。お金を出すのに手間取ってしまい、ようやく整理券を探し出して料金箱に入れた時、私は、さっきトンネルの前で見かけたあの人が、もう会えない人だったことに気がついた。

バスが行ってしまい、私はゆっくりと今来た道路を振り返った。  
ここにくるまでに、トンネルなんか今まであったらどうか。  
あったような、なかったような。

早く元気になろう。  
私は病院への一歩を踏み出した。

## 第25話 こっくりとうなずく

---

僕はポケットに手を突っ込みながら、帰り道をいつもの3倍以上時間をかけて歩いていた。

ポケットの奥には、できるだけ小さく降りたたまった数学のテストが入っていた。

小学校から高校の今まで、テストで50点以下の点数なんて取ったことがなかった。それなのにこの点数は...

原因はわかっていた。確率だ。

数学の範囲が確率の箇所に来たとたん、僕の頭は溶けてドロドロになったキャラメルみたいにこんがらかった。

どうしたことだろう。

何回に一回くじがあたるとか、どうしてわかるのだろう。

未来を予測できるのだろうか。

足取りは重い。こんな時大人は、一杯引っ掛けて帰るのだろうか。と僕は想像した。

それができない高校生は...

ぼくは帰り道をちょっとそれた所にある、児童公園に立ち寄った。子どもの頃からよく遊んでいた場所だ。

ブランコにすらすら揺られていると、不思議な構図をみつけた。

それは、一人のおじさんと、一人の幼児とで構成されていた。おじさんは、ベンチに座っているのだが、かなり前傾姿勢で、肘を膝に立て、手の上に顎を乗せ、完全に眠っている。その顔をガン見している幼児は、ベンチの目の前にある砂場にすこしうずもれた状態で座っていた。

僕はそれを横目で見ていた。おじさんは比較的普通なのだが、それを見ている幼児の眼差しは、真剣そのものだった。まばたきひとつしない。

僕は時々まばたきしながら、その様子をうかがった。

おじさんの寝息が聞こえてくる。おじさんなのに、いびきはかいていない。

そしてこの不思議な構図の中で、もう一つ不思議な出来事がおこった。それは、幼児がこっくりとうなずいたのである。スースー寝息を立てているおじさんに対してである。

何に対して？

その内に、幼児は立ち上がった。砂がバラバラと幼児の服から舞い落ちた。

そしてなんとなく、僕はその幼児と目があった。

何にうなずいてたの？と僕は思わず口にしていた。

男の子は、

おじさんが人生のきょうくんを教えてくれたからと言った。

なんて？

「人生の八割は上手くいかない」って

でも、おじさん寝てるよ？と僕は一番の疑問をついに取り出した。

「お兄さんもやってみれば！」

そうすると男の子は、鉄棒のある方へスタタタと走って行ってしまった。

いけない。子どもを、怖がらせてしまったか。

けれど僕は好奇心に駆られて、砂場に座ってみた。砂の感触が懐かしい。

そして、おじさんの顔をまじまじと見た。

しかし、5分待っても、10分待っても、おじさんは語りかけてこない。なにかテレパシーみたいなものを使っていたのかと思ったが、そうではないのか。それとも、子どもにしかわからない何かがあるのだろうか。ぼくも、もう歳だ。と、人生で初めて思った。

おじさんの眉間にはしわが寄っていた。僕もいつかこうなるのだろうか。

その顔を見ていると、じわじわとなにか感じるものがあった。

人生の八割は上手くいかない

そんなに上手く行かないものか？とさっき聞いた時は思ったけれど、おじさんの顔を見ていると、だんだんそんなような気がしてきた。

ふうー、と僕はおじさん鑑賞を終わりにして立ち上がり、おじさんの隣に座った。

向こうでは、さっきの幼児が活発に鉄棒をしていた。逆上がりの練習をしているようだが、何回かに一回しか成功しない。

「若いっていいなあ」

僕は自然に小さく折りたたまれた、数学のテストに手を伸ばした。ポケットの中で、それは温まっていた。少し熟成されたみたいだ。

一つ一つ開いていくと、20という赤くて力強い文字が見えた。

さっき折りたたんだ時のような切羽詰まった思いは薄れていた。

「人生の八割はうまく行かない」

また、この言葉が頭によぎった。

「たしかに」

そういと、僕は立ち上がった。

すると、僕の帰る雰囲気を一早く察知し、さっきの幼児がこちらに向かって駆けて来た。

「ねえ、お兄さん！」

「ん？」

「人生の八割はうまく行かないって、どういう意味？」

「うーん。」

と僕は考えた。

「10回の内、2回は、上手く行くってことさ」

「そう！」

そう言って、幼児は、また鉄棒に駆けて行った。

おわり

## 第26話 結ぶ

---

春の匂いに誘われて、正平は家を出た。桜の花びらが、ちらりと舞い降りて来た。

もうほとんど葉桜になりかけている。

それなのに正平は、この時期の桜が好きだった。

最後に落ちる花びらはどれか。それを予想するのが好きだった。

正平には今日の昼から、目をつけている花びらがあった。

それがまだ、残っているのか、それを確かめたい。

正平は、川べりにある桜の木へ向かった。

夜の川は真っ暗で、何をしなくても、飲み込まれそうだ。街灯がほんのり届く範囲に、その桜の木はあった。心なしか、昼間とは違った木に見える。実際そうなのだ。昼間あった花びらの大半は、今はどこか知らない川の中を流れている。

正平は、あの花びらがまだ残っていたのをみつけた。

「ほう、良かった」

君もいつまでいるんだろうか。

すると、花びらが答えた。「あなたのことが好きです」

正平は答えていった。「そうか、それじゃあ、いれる時まで一緒にいようか」

「ほんとう」

「うん。その証拠に、ほら、僕はここにいるよ」

そう言って、正平は、川べりに横になった。

春の風が、ふうんと桜の花びらと、正平の体をなでていった。

正平は、目を閉じた。そして桜の花びらのことを想った。

そして、今、この瞬間のために、自分は生まれて来たのだと思った。

僕がいて、花びらがいる、この瞬間のために。

きゃはははと子どもの声がした。

正平は目を覚ました。もう桜の木は朝の光を浴びて、生き残った花びらたちが、きらめいていた。

正平はそっと身を起こした。そして、あの花びらを見た。正確にいうと、あの花びらの跡を見た。

そこに、もう花びらは残っていなかった。正平は、地面を見た。そして川の中を見た。

無数の花びらたちが、そこに横たわっていた。

あの花びらはどこへ行ったのだろうか。もう、正平の生きる時間は終わってしまった。

正平は、落胆して川べりの道を家へと戻って行った。途中、向こうから親友が歩いて来た。

よう、というなり、親友はさっきの子どもみたいにぎゃははと笑った。

なんで笑うんだろうと正平が待っていると、親友はこういった。

「鼻にも花見させてたのかい」

え？と正平は自分の低い鼻を触った。そこには、桜の花びらが一枚、乗っていた。

「ああ、ここにいたんだね」

そうって、正平は、花びらを大事そうに飲み込んだ。

「もう少し、一緒にいよう」

「俺はもう行く」と、友達が言った。



## 第27話 ひよろ長い

---

私は、ある植物を育てている。

育て始めてから、もう、うん十年経っている。

小学生の頃、学校で育てていた朝顔が、私のだけ朝顔じゃなかった。

いつまでも花は咲かないし、冬になっても枯れなかった。

そして今現在、ここにいる。

茎はひよろ長く、もう少しで天井に着きそうだ。

成長は遅い。そして今にも枯れそうなのに、なかなか枯れない。

弱々しい茎は、なんにも支えをしないのに、不思議とすくっと立っている。

私は気が付いた時だけ水をやり、気を張らずに育ててきた。そのせいか、この植物も気を張らずに生きているようだ。まだ一度も花は咲いたことがないのに、私の家に我が物顔で、居座り続けている。

ある日、予感がした。

この予感は、私の場合、すごくよくあたるのだ。

明日、花が咲く。

私の心は嬉しさでいっぱいになった。

明日咲く、明日咲く、明日咲く

胸がツンと痛くなって、眠れなかった。

私は仕事から早く帰って来た。

いそいそと、植物に近づく

ひよろ長い茎のずっとずっと上の方

そこには、朝顔にそっくりな、紫の花が咲いていた。

私の夢は叶った。

## 第28話 めじ

---

僕は、子どもの頃から目の下にクマがある。

それは鮮明な夢を毎日見ているからだ。

現実より絶望的な世界や、現実より理想的な世界を、自分の頭の中で作り上げているのだから、疲れるのは当たり前である。たまに、そんな全体像を作り上げる自分の脳の能力を、底知れないと思うことがある。

洗練されたデザイン、設計。だれがこんな世界を作りあげたのか。自分だ。

けれど目が覚めると、みすぼらしい恰好をして、外へ出かけていく。

そしてやってくるのは、やらなければいけないこと。

やらなければいけないことは、灰色がかった薄い緑で、いくら食べても増えていく、藻のようだ。

夢で見た、あの世界に住めるといい。

そんなことをたまに思う。

カラフルな芯を持った木々、青や赤の色鮮やかな葉、

柔らかなシュークリームみたいなベッド。小さな自分専用の冷蔵庫。

そんなことで、僕は休む暇がない。

目を覚ませばやらなければいけないことが押し寄せて、目を閉じれば、鮮明な夢が押し寄せる。

切れ目のないそれらは、液体のように僕の中を通りすぎる。

いつかおぼれてしまうのではないかと、僕は思う。おぼれないように、僕は必死で今日も泳ぐ。

生まれてから、死ぬまで。ずっと。

## 第29話 非才

---

このところ、私は自分の庭に池を作っている。

それは、長年夢見たことが、実現できないということを思い知ったからである。

職業適性検査というものが義務化されてから、早六年がすぎようとしている。

私は法令にしたがって、今年初めてその検査を受けた。

私の職業希望欄には、「泉を作りたい」と書いた。

しかし、その結果、なれる確率は、0%だったのである。

私は落胆した。途方もなく落胆した。

子どもの頃からずっとあこがれていた。

泉をつくることができれば、他は何も望まないとさえ思った。

けれど、この検査の結果では、私は挑戦することすら罪になってしまうのだ。

私は、あきらめきれず、自分の庭に池を作ることを思いついた。

この位なら、許されるだろう。

スコップを持ち出し、私は穴を掘り始めた。土は思ったより堅く、掘っているうちに、余計なことは、何も考えられなくなった。

頭は空っぽになり、新鮮な空気だけが、頭の中に流れた。

ようやく自分の納得いく深さまで掘り、止水作業を終えると、私は土の上に寝転んだ。

「あとは、頼むよ」と空に語りかけた。

次の次の日、どしゃぶりの雨が降った。

池の中に、どんどん水が溜まっていく。

どこかからやってきたカエルが、どぶんと、池の中に飛び込んだ。

「これで、完全な池になった」と、私は、つぶやいた。

## 第30話 引ける

---

勤務時間が終了した。同僚たちが、次々に席を立ち、「お先に失礼します」と言っては退社していった。

私は静かに皆が退社するのを待った。ようやく最後の一人が立ち上がり、お辞儀をして出て行った。

私は窓から、外を見下ろした。会社から出て行く人々が、それぞれの家に向かい、歩いていく。

今朝は雨が降っていたから、傘を持っている人が多い。

傘を持っていない人は、鞆の中に折りたたみ傘を入れているか、会社のロッカーに、置き傘でもしているのだろう。

私は自分の持ってきた、新しい傘のことを思った。

宇宙の絵が描いてある傘で、ちょっと恥ずかしくて、会社に着く少し手前で、傘を畳み、走ってきてしまった。そのおかげで、少しスーツが濡れたので、今日はじめじめした中で過ごした。

私は最後にオフィスを出て行った男が、信号を渡って駅の方角へ向かうのを確認した。

よし。

これから、私の時間だ。

私は、自分の席へもどると、自分のデスクと、隣の席の課長のデスクを移動させ、向かい合わせにした。そしてその隙間から中へもぐりこむと、隙間を閉じた。

中は、カプセルのようになった。私はそこに寝そべった。

じめじめしたスーツが、心地よかった。湿度も適温だ。

私は足を伸ばして目を閉じた。この空間は、こんなに広かっただろうか。足を伸ばせるほど。

けれども私は足を伸ばした。そこは、私の傘の中だった。

ここは、絶対安全な場所なのだ。

なにがあっても安全な場所は、地球上でここしかない。ということ、私は知っていた。

ここは、地震や台風といった、天災から守られるだけでなく、戦争や、原発事故といった人災からも守られる。それだけでなく、心の安全も保たれる。誰も私のことを傷つけないし、自分も私を傷つけることはない。

私は不安から解き放たれた。

ささくれだった心が、なだらかになって、とても低い丘のようになっていくのを感じた。その緑の丘を、少女が走り抜けていた。それは、何かから逃げているのではなく、自分の想いを振り切るために走っていた。

やがて女の子はたちどまり、地平線をながめた。そんなことは無意味だと、私が教えたからだ。ただ遠くをみつめればいい。ただ、遠くを。

そろそろ守衛さんが見回りにくる時間になった。私はデスクの下からのそのそと這い出た。

ここに長くいてはいけない。生きる力がなくなってしまうからだ。けれどたまにここに来なければ、生き続けられないことも、知っていた。

私は明日も、ここにもぐるだろう。一番安全な場所に。

会社から出ると、雨が降っていた。

皆が帰る時は降っていなかったのに。と、思いながらも、私はあの新しい傘を広げ、堂々と帰っていった。

## 第31話 ブリーチ

---

「お部屋の片づけをしましょう」と、家庭教師の先生が言った。

家庭教師の先生は、私のことなどおかまいなしに、さっさと地域指定のゴミ袋を自分のバッグから取り出すと、それを広げた。そのゴミ袋には、40ℓと書かれていた。普段家で使っているのは20ℓだから、先生は、かなりやる気だ。と私は感じた。

「あ、あの、勉強の方は良いんですか？」

私は先生のやる気を目の前にして、無駄だと知りながらも、こう質問した。

「あなた、成績が下がっていますね。なぜだかわかりますか？」

「は、はい。それは、社会の年表が覚えられなくて……」

「語呂合わせですね？」

「はい」

「では、こうしてみましよう。今から、このゴミ袋に、何かが入る度、あなたの脳に隙間ができます。その隙間ができた瞬間に、語呂合わせを一つスッと入れるのです」

「はあ、そんなにうまくいくものでしょうか」

「行きます。実証済みです。」

「誰で実証済みなんですか？」

先生は、その質問には答えず、まず床に落ちていた、ちびた鉛筆を拾い上げた。

「これは、捨ててもいいですね？」

すると私はびっくりして答えた。

「え、だめです。まだ書けます」

「このように短くなってしまっただけは、持ちにくいし、書きにくいでしょう。ある程度まで短くなったら、捨ててもいいのですよ。」

「でも、だって、もったいないし」

「では、あなたは、どのような状態になったら、鉛筆を捨てるのですか？」

私は生まれてからこれまでの記憶をたどってみた。そういえば、私は一度も鉛筆を捨てた記憶がなかったのだった。それどころか、限界まで使った記憶もないのだった。いつも、ある程度まで短くなったら、それを放っておいて、新しい鉛筆に乗り換えていた。

「ええと、捨てたことはありません」

「では、このような短くて、使えなくなった鉛筆が、この家のどこかに、いくつもあるということですね」

「はい。そうなりますね」

「では、この一本ぐらい、なくなってもいいでしょう。どうせ床に転がっているくらいなのですから」

それでも私は忍びなくて、その鉛筆を先生の手からもぎ取った。

「あの、でも、あれがあるんです。鉛筆を長くできる道具が」

私は、ぐちゃぐちゃの引き出しの中から、その道具を取り出した。鉛筆を、筒状のものにはめて、ネジをしめると、鉛筆の柄が長くなった。

「これで、もうしばらく使えますから」

「そうですか」先生は冷たく言い放った。

「じゃあ、これはどうです？これは捨ててもいいでしょう」

それは、しわくちゃになってちぎれたメモ帳のかけらだった。

「ちょっと見せてください」

私はそれをまた先生の手から奪いとると、じっとそのメモの破片に目を傾けた。そこには、ゲームの攻略法が書かれていた。

「あ、これはだめなやつです。ここに、重要事項が書かれています」

「あなたそれを、ここに放っておいたのですか？今拾わなければ、もう一生見ることはなかったでしょう」

「いや、でもいつかまた、必要になる時が来るんです。お正月休みとか」

「そうですか」ため息をつきながら、先生は、次のものを拾おうとした。

「あ、それはだめです」

先生が拾うより先に、私は先生の足元にあった針金を拾った。

「こんなものあったら、あぶないでしょうよ」と先生は言った。

「これは、ちょっとこれから作るものの材料なんです。これをどうするか悩んでいたら、昨日寝ちゃって」

「それならそれで、テーブルの上にあげるとか」

「はい、すみません」

私は、それを机の上にあげた。ノートの上に置かれた針金は、もさもさっと揺れた。

「じゃあ、これは」すかさず先生が手にしたのは、噛んだガムを包んだ紙屑だった。

「それは、いいです」

「ようやく一つ見つけたわ」

先生はそう言うと、40ℓのゴミ袋に、それをさっと投げ入れた。

「さあ、今よ、今、あなたの脳みそに、容量があいたわ」

「は、はい！」

私は社会のノートを見直そうと、机に向かった。しかしそこには、さっきおいたばかりの針金が、堂々と横たわっていた。うっ！と私は思った。

「ああ！もうだめだわ！」と先生はがっくりと肩を落とした。

「どうしてなんですか？」

「今、せっかく空いたスペースに、あなたは針金を入れてしまった。」

「そうなんですか？」

「そうよ。だから、もう一回やりなおしよ！」

「はい、先生！」

このようなスパルタ式のやりとりのあと、コンコンと、ノックの音が聞こえた。

「先生、休憩でも」

母が、リンゴケーキをお盆に乗せて、ガチャリとドアを開けた。

「あら、あら、ずいぶん部屋がきれいになったじゃないの」

そう言いながら、母は床に落ちていた丸めたルーズリーフを足で避けた。

「いえ、片付いたように見えるだけで、ただ物を端に寄せただけなのです」そういいながら、先生はそのルーズリーフを、サッとごみ袋の中に入れた。

先生のゴミ袋の中には、まだ、さっき入れたガムのくずと、そのルーズリーフしか入っていなかった。

「あらー、ほんとに申し訳ないですわ。こんなことまで指導してもらって」

そう言いながら、母はリンゴケーキを先生の前に置いた。

「それじゃ、よろしくお願いしますね」

そう言うと、母は出て行った。

「先生、一休みしましょう。このままでは、明日までに終わりませんよ」

「明日までやるつもりですか？私の勤務時間は、あと一時間です」

「あ、そうでしたね」

そう言って、私たちはリンゴケーキをおいしく食べた。

すると先生は、突然、大きなくしゃみをした。「ぶえっくしょい」

「せんせ、せんせ、はい、ティッシュ」

「あびばぼうばいばぶ」

先生は、チーンと鼻をかんだ。「燃やせるゴミのゴミ箱は、どこですか」と先生はティッシュを丸めながら言った。「あ、はい、これですけど」

けれど私の視線は、じーっと先生の40ℓのゴミ袋に注がれていた。「それに入れればいいんじゃないですか？」

「あ、そうね、そうね、うっかりしてたわ」先生は、ティッシュをゴミ袋にシュッと入れた。

その時、私は大きな声でこう言った。

「ハットトリック薬子の変！」

「それは、なんですか？」

「語呂合わせです。」と、私は言った。

## 第32話 結ばれる

先週から、私は悪い運気とお友達になった。私はこの悪い運気にワルンと名前を付けた。ワルンは今、私の肩に、片膝を立てて座っている。バランスが悪くて落ちないのだろうかとお思いかと思いますが、ワルン君はちょっとやさつとの体重移動ではこぼれません。ぴったりとくっついています。嫌になる程に。

ワルン君は、まず私の体力を奪いました。風邪を引いた私は、病院に行こうとしました。けれど、ワルン君は、私の方向音痴という弱点を見逃しはしません。私の性格など熟知しているのです。いつもいく病院に、私はなぜか迷ってしまいました。たどり着いたのは、病院ではなく神社でした。みなさん、悪い運気が、なぜ神社に自ら連れていくのか、とお思いでしょうが、ワルン君は、神社で振り落とされるほど弱くありません。むしろパワーアップします。

私は早々に元の道へ戻りました。急いでいたのです。午前の診察の時間がもう終わろうとしていたのですから。私はなんとか元の道に戻り、さっそく病院への道を急ぎました。病院の駐車場はとても広くて、私はその駐車場の安心感にひかれて、この病院をもよりの病院に設定しているのですが、今日に限って病院の駐車場は満杯でした。なにか、イベントをやっているようなのです。出店が出ています。病院がイベントをやるなんて、考えられません。参加者はみんな病人です。みんな、青い顔をして参加しています。私はそんなイベントには目もくれず（と、いっても実は気になっていました）、病院に急ぎました。歩道を歩いていると、花壇に水をやっているおじさんがいました。おじさんは家からホースを引っ張って、わざわざ歩道のアスファルトのすき間から生えている雑草に、水をやっていました。「かんしんかんしん」などと心の隅で思いながら、私はホースを軽い足取りで飛び越えました。しかし、そこは病人のするステップ。私の足は、ホースにつっかかり、私の体は宙に浮き、私の掌はアスファルトをこすり、私のズボンは衝撃で破け、鞆の中味は飛び散りました。

これが、ワルン君のすることなのです。

私は耳元でワルン君が笑う声を聞きました。

おじさんは、雑草に夢中で、私が転んだことにも気づいていません。私はおじさんに恨みも言えず、ただただみじめな思いでたちあがりました。ズボンは4つしか持っていないのに。膝の痛みより、4つしか持っていないズボンがこれから3つになり、着まわせるのか、という心配の方が先に立ちました。

膝は、病院で治してもらおう。そういうイレギュラーな要望は苦手としているのですが、この際そんなことも言っていない。私はそう強く思いました。そして病院の扉を開けたのです。

「午前の部終了」「本日、午後の診療は、イベント開催のためお休みします」

わたしは膝の痛みが急にじんじんしてくるのを感じました。

家に帰ってからも、ろくなことはありませんでした。

私は窓を閉めようとして、扉に指を挟めました。

親戚も死にました。

嫌なメールも来ました。

私が何をしたのでしょうか。

私はワルンを睨みました。

今日も、しゃがんだとたん、スカートのホックがポツリととれました。私は黒い糸をブラックホールの中から見つけ出し、針に通してスカートにホックを縫おうとしました。けれども糸がどうにも絡まって、変なところに輪はできるし、はずそうと思えば、そうした覚えもないのがっちり縫い付けられているしで、前にも後ろにも進めなくなっていました。

ズボンにつづき、スカートもかよ。と思った私は、がっかりして、スカートを投げだしました。

どうして、私には、服がないの。どうして、私には運がないの。どうして私には何も無いの。

「僕がいるじゃない」と、肩越しに、誰かがささやきました。

「え？」

振り返ってみると、それは、肩に格好良く座っているワルンでした。

### 第33話 むちゃ

---

突然、私は、何のために頑張っているのだろう。と、いう思いが、全身に行き渡った。

私はいつだって今を犠牲にして、未来の為に頑張ってきた。しかし、せっかく今を犠牲にしてまで夢見た未来で、私はさらに未来の為にがんばっていた。さて、一体私は、いつ生きるのだろうか。

とりあえず、私は仕事を辞めた。そして、好きなことをして過ごそう。と、思った。

けれど、私には、本当に好きなことがなかった。いつも自分の欲求は後回しで、好きなことを追いかける時間もなかった。

とりあえず、私は寝た。今まで寝たいだけ寝たことなどなかったから、とても気持ちよかった。

そして次に、食べたいものを食べた。自分では作ることができなかったが、この世には、出前という便利なものがある。私は、ピザを一枚注文し、誰とも分けることもなく、一人で全部食べた。円すべてが私の中に収まった。私は満ち足りた。

ああ、これが、生きるという事か。と、私は思った。

私はベッドの上で、一日のほとんどを過ごした。退屈になれば、スマホで動画を見たり、ゲームをしたりした。

世界中の人が、私を笑わせてくれ、楽しませてくれた。

けれど、心の中のもやもやが、完全に晴れることはなかった。

何か心の奥の方で、今まで培ってきたものが、警鐘をならし続けていた。

何かをしなければならない。

けれど、何をやる気も起きなかった。

そんなふうにして一年が過ぎたころ、私は、ある新聞の広告を見つけた。それにはこう書いてあった。

出張足湯 日頃の疲れ、悩み、すべてお湯にとかしてしましましょう！

とき：きょう 午後3時36分

ところ：ほにゃらら公園

私はなぜか、この広告にひかれた。今日も別に用事はないし、ほにゃらら公園は、歩いて5分くらいのところにある。

行ってみるか。と私は思った。

昼まで寝ていたので、今は午後1時だった。とりあえず、私はお風呂に入った。これから足湯に行くのに、お風呂に入るのは何か変な感じがしたが、もう3日もお風呂に入っていなかったので、人前に行くのは恥ずかしかった。

お風呂に入って髪を乾かすと、もう2時だった。しかし、ここからの1時間半は長かった。

私はゲームをしながら待つことにした。チラチラと時計を見るのだが、5分づつしか進まなかった。

ようやく3時半になり、私はジャンパーを羽織ると、外に出た。久しぶりの外の空気だった。私はポケットに手を突っ込み、歩いて行った。

公園に着くと、数人の子どもたちが、鉄棒をしているだけだった。

たった5分歩いただけなのに、もう息が切れていた。

足湯はどこだろうと目をこらしてみると、砂場の真ん中に、板が敷かれ、その横に、あやしげなひげのおじさんが、しゃがんでいた。あれだな。と私は思い、近づいて行った。砂場のところには、そのおじさん一人しかいなかった。「来るのが早すぎたかな」と私は思った。

「はい、いらっしやい」と、あやしげなおじさんは顔をあげ、にっこりとわらった。

「あの、足湯やりたいんですけど」

「はい、何名様ですか〜？」  
みりゃわかるだろ、と思いながら、「一名です」と言った。  
「はい、一名様〜。500円になりやす」  
高!と思ったが、きっとこれだけで生活していくには大変なのだろう、と、私はポケットから小銭入れをだし、500円を払った。  
「はい、ここに座ってね〜。右足出してください〜」  
「片方ずつ入るんですか？」と私は聞いた。  
「はい〜、靴脱いでね〜、靴下もね〜」と言って、おじさんは私が脱いだ靴下を、籠に放り投げた。  
「はい、じゃあ、ここに足を入れてね」下を見ると、砂場の中に埋め込まれた桶に、お湯が張ってあった。湯気が立っている。私は恐る恐る、足を入れてみた。少し熱めのお湯が、じ〜んと染み渡った。「あ〜、気持ちいいですね」「そうですね、そうですね」そう言って、おじさんはしゃがんだままにここにこしていた。「このまま、30分間、つかっててくださいね〜」「30分もですか？」そんなに独占していたら、他の人が入れないじゃないか。と私は思った。  
「ゆ〜っくり入るのが良いよ。それに、500円も頂いてるからね」  
そんなもんか、と私は思った。他にお客さんも来ないようだし、私は言われたとおりにした。  
しかし、この寒空だ、初めはよかったが、だんだんお湯がぬるくなってきた。  
「あの、おじさん、お湯がぬるくなってきたんですけど」  
「まだまだ〜」  
お湯を足すとかしてくれないのだろうか。と思ったが、僕は黙っていることにした。  
けれど、だんだん体が冷えてきた。もうだめだ、限界だ。「おじさん、もういいです。上がります」  
私はもう勝手にあがろうと、足をあげようとした。けれど金縛りになったように、右足は動かなかった。「え?え?」  
「まだ30分経ってないよう。だから上がれない」  
おじさんは、薄目で笑った。  
私はなんだか、一瞬怖くなった。  
けれど、またおじさんにはここにこした顔に戻って、こういった。  
「あなたの心、この左足のようになってるね」  
左足?と思った私は、まだお湯につけていない方の足を見た。  
「そう、靴下履いて、靴も履いて、もうぎゅうぎゅうね。こっちも脱いで、お湯に入ったら?」  
さっき片方って言ったのはおじさんじゃないかと思ったが、私はだまってもう片方も脱いだ。外の空気がひんやりした。お湯につけてみると、さっきはぬるいと感じたお湯が、一瞬だけ暖かく感じた。けれどやっぱり、ぬるかった。  
「さあ、どうする?」とおじさんは、やにわに聞いて来た。

どうするって言ったって.....

その時、さっきは1ミリも動かなかった右足が、自由になっているのが分かった。  
私は思わず、ワー——————!と叫んで、両足で、ばしゃばしゃと水面を蹴った。水がはねて顔にかかって服がびしょびしょになっても、私は水面を蹴り続けた。なぜそうしたいのかわからなかったが、それはとんでもない解放感だった。  
とうとう息が切れ、足を足湯につけたまま、砂場に寝転がった。  
汗が、額から流れ、砂場に落ちた。空を見つめると、雲が、うろこ状になっていた。  
「はい、30分経ちました〜」とおじさんの声がした。  
「はい」と言って体を起こすと、「ね、体あったまったでしょ」と、おじさんがウインクした。

「ですね」と、僕は言った。

## 第34話 鞭打つ

なんでもかんでも頑張りすぎたと、私は半生を反省した。

得意なことはもちろん、苦手なことこそ人よりも頑張らなければと、得意なこと以上に努力を重ね、楽しみは後にとっておく性分だから、本当にやりたいことはいつも後回しで、これまでの人生で、自分の本当にやりたいことに本気になったことがなかった。

気づけば、60歳を超えていた。

今から何ができるだろうか。と私は考えた。

本当にやりたかったことを今からやるのか。と考えた。私はぞっとした。なんと時間を無駄にしてきたことだろう。人生は意外と短いのだ。できることは限られているのに、やりたくないことばかりやってきてしまった。なんてことだ。

今すぐ始めなければ。

けれど本当にやりたいことは、エベレストのように大きくて、私にはとても登る勇気はなかった。とりあえず、近くのスキー場から登ろう。と私は思い立った。

そういえば、10年前に新しいスキー板を買ったのに、まだ一度も滑ったことがなかった。

毎年毎年滑ろうと思うのに、時間がとれなくて、結局いつも春を迎えてしまっていたのだった。

「まったく。やりたくないことをやっていたせいだ」

私はまず、スキー板を取り出すことから始めた。おんぼろ物置の中に、それはあった。私の中で、そのスキー板は新品のはずだった。それなのに、取り出したのは、錆びだらけのスキー板だった。

10年の歳月は、私にとってはあっという間でも、スキー板にとっては、とても長い、待ちくたびれた時間だったのだろう。そんなスキー板の気持ちを思うと、私は申し訳ない気持ちになった。

なんでもっと早く、スキーをしに行かなかったのだろう。

けれどスキー板は、まだ死んだわけではない。私はスキー板の錆を落とし、ワックスをかけた。

そして、またスキー靴をおんぼろ物置から取り出し、中身を確認した。ゴーグルと、帽子と、10年前の日付のリフト券がそのまま入っていた。

そして私は、スキー当日を待った。

怪我をしたら困るので、私は古い友達を誘った。

「久しぶりだな」

「滑れるのか？」

「わからない。お前こそ」

「俺は、年に何回かは滑ってるぞ」

「そうか」

急に不安になってきた。リフトは乗れるだろうか。

私は模範的な姿勢で、リフトに乗り込んだ。後ろからリフトの椅子が迫ってくるとき一瞬ひるんだが、落ち着いて腰をおろすと、スピードは思っていたよりゆっくりだった。

リフトに揺られていると、色々なことがよみがえった。リフトから手袋を落としてしまったこと、ナイターのリフトで聞いた、当時の流行りのウィンターソング、吹雪の中での滑走。足が冷たくなるまで、子どもの頃はよく滑ったものだった。

。

そんなこんなで、あっというまにリフトは降車場に近づいていた。私はまた模範的な姿勢で、スキーの先を少し上げて着陸を待った。

「はい、どうぞー」という声と共に、私はゆっくりと立ち上がった。完璧だ。体が覚えている。

そして、私はススーっと、大きくカーブしてグレンデに出た。

そして、坂を見下ろした。

「は一」私はため息をついた。山の下に広がる町が小さく見える。こんな高いところに来たのは、いつぶりだろうか。

「さ、行くぞ」

友達は、さっそく滑り出した。

まけじと私も滑り出した。

空がちらちらと見える。青い空だ。そして、私は、とても速い速度で移動している。なんの乗り物にも乗らず。

そのことが、とても軽快に感じた。自由だ

少しでもひるむと、余計に怖くなる。私は自分の意志で、早く滑った。

友達も追い越し、誰もいないゲレンデを、なるべくブレーキをかけずに、2～3回の大胆なカーブで滑り切った。

私は恐怖よりも興奮が上回ったのを感じた。

シュッと止まると、冷静になった。外国人の人が、私を見ている気がして、私は途端に恥ずかしくなった。その時、脛のあたりで、違和感を感じた。

ん？

なにか、ふわふわしている。

よくみると、スキー靴の脛に当たる部分が、はがれて雪に落ちていた。

プラスチックが劣化していたのだ。どうにかしようとすればするほど、靴はボロボロと崩れて行った。しかも両足ともだ。

「どうしたんだ」いつのまにか降りて来た友達が、私のスキー靴を見て笑った。

「何年前の靴だよ」

「15年前」

「もう今日は滑れないな」

「まだ一回しか滑ってないのに」

「また今度、滑りに来いってことだ」

そうか、と私は思った。

とりあえず、長年やりたくてできなかったことができたことは事実である。そのことは認めなければならない。自分に対して。

「よくやった。」と、私は自分と、スキー板と、スキー靴に、言ってやった。

わたしは夢を見ているのでしょうか。さっきから、何者かに追われています。しかも、一人じゃないんです。複数います。けれども恐怖はあまり感じません。なぜなら追っかけてくるものが、ちびで、かわいいから。たいしたことはありません。それでも、わたしは全速力で、走ってそれらから逃げています。

どうしてこんなに冷静でいられるのかというと、逆にこれが夢なのではないかと、思うからであって、本当は、焦らなければならない状況なのではないかと思えます。それでも、息は切れるし、足は痛いし、といった、身体的苦痛もそれほど感じないので、わたしはどうしても、こんなに悠長に現状をレポートする余裕くらい、感じられるのです。いいえ、本当に余裕など、持ってはいけない身分なのです。時間はどんどん過ぎていき、わたしももう34歳です。34歳といえば、昔わたしが考えていた、わたしの寿命の日です。それまでに何かをなしとげなければ、わたしはもう、死んだも同然なのです。それなのにわたしは、むだに、今の現状を、こーやって、皆様に、お伝えしようとしているのです。

その現状とはこうなのです。今、わたしは、カマンベールの間を走っています。

わたしは、カマンベールの間を走っているのです。コピペしたわけではありません。その証拠に、語尾が違うでしょう。二回も同じことを言ってしまったのには、訳があります。それにしても、わたしが想いのたけを打ち込むのに、パソコンがついていっていません。みなさん、ご存知でしたか？寒いところでは、パソコンや、電卓の動作が遅くなる現象に。

けれども今は、寒くありません。昨日から、春が来たのです。けれども動作が遅いのは、おそらく、未読のメールが900通になってしまったからでしょう。わたしはメールが嫌いです。だからついついためてしまう。

どうしてこの時代に生まれて来たのか、わたしはわからなくなります。昭和の時代に生まれたかった。というか、わたしは昭和生まれです。けれどもなぜか、昭和の末期に生まれたものだから、昭和生まれという気がしないのです。けれどももう昭和の話はやめましょう。昭和とか、平成とか、和乎とか、どうでもよいのです。肝心なのは、わたしが今、カマンベールの間を縫って、何者かの追手から逃げているということだけなのです。

カマンベールといっても、大きさが半端なくあります。私の背丈を優に超える高さで、4mくらいあります。それが沢山わたしの目の前にぼつんぼつんと置いてあり、その間をわたしは走っています。

追手たちは、ちいさいけれど、身のこなしがすばやかで、特に上下の移動に強いらしく、カマ

ンベールの上に飛び上がってその上を走り、ジャンプしてカマンベールからカマンベールに飛び移ったりして追っかけてきます。追手たちは、完全な球体の頭をして、体育帽子をかぶり、体育着を着ています。体育帽は、色んな色があり、赤、緑、黄、青と、とにかくかぶっている色は一つもありません。そしてそれぞれの体育着には、ゼッケンがぬい付けてあり、それぞれに何か書いてあるのですが、わたしは走りながらなので、それがなんなのかが、よく読み取れません。わたしの通っていた学校では、体育着がなかったので、それが少し羨ましくもあり、大変そうだなあと思う気持ちもあります。体育着を忘れたら、どうするんだろうという気持ちも、あります。その時は、隣のクラスの人にでも借りるのかなあと、思ったりもしますが、わたしの学校はクラスしかなかったので、それもできないなあと考えてしまいました。

そんなことを考えているうちに、わたしの腕に、オレンジ色の帽子をかぶった追手がとびついて来ました。

「やめてー！」

初めてわたしは恐怖を感じました。

その感触はまるでホワイトチョコのようでした。匂いもホワイトチョコでした。

わたしが振り払うと、そのオレンジ帽は転がってバラバラに碎けてしまいました。

わたしの腕に、オレンジ帽の指の欠片がまだくっついていました。わたしは走りながらそれを口に入れました。ホワイトチョコの味もしました。

ホワイトチョコの感触と、ホワイトチョコの匂いと、ホワイトチョコの味がするという事は、これは、ホワイトチョコなのであろうか。と私は思いました。けれど、飛んだり跳ねたりするホワイトチョコは見たことがありませんし、そのオレンジ帽のつけていたゼッケンには、石鹼と書かれていたので、きっとこれはホワイトチョコではなく、石鹼だったのでしょう。けれどわたしの口からは、泡は出て来ませんでした。おいしい味だけが残りました。

さらに追手が増えたような気がして、私はまた走りました。ジャンプは得意なのに、足の遅いわたしになかなか追いつけないのは、前に進む力を、上下運動に無駄使いしているのではないかという懸念が頭をもたげました。けれども、それは相手に知らせることではありません。わたしはだまって逃げました。

次に私に追いついたのは、紫色の帽子の追手でした。

顔は、さっきのオレンジ帽と、少しも変わりません。ただそのゼッケンには、憎らしいと書いてありました。

それが、紫帽の感情なのか、それとも、名前なのか、住所なのかはわかりませんでした。私

は納得しました。そして、もっともっと駆けました。けれども憎らしいは、どんどんスピードを増してジャンプの回数を増やしています。それだけ近づくのも早くなります。わたしはとうとう追い越され、とうせんぼうをされてしまいました。

「やい、おまえ、なんなんだ」とわたしがいいますと、紫帽は、「やい、おまえ、なんなんなー」と言いました。「やー」とわたしは言って、手に持っていたホウキで、紫の頭を叩きました。

ホウキなんて今までもっていただろうかと一瞬思いましたが、助かったので、深くは考えないことにしました。

憎らしいは、「やーはははは」と言って、笑いながら倒れました。わたしはバラバラになった紫帽の欠片をちょっと拾って、食べました。今度は、抹茶チョコの味がしました。

「白いのになんで抹茶チョコの味がするんだろう」と私は思いましたが、それもまた一興です。

続いて、私が向かったのは、カマンベールの間と間でした。そこにしか道がないからです。けれどすぐに、汚い色の帽子をかぶった追手が追いついて来ました。汚い色とはどういう色かと申しますと、それはぞうきん色なのです。ぞうきんは、汚いところを拭き取ることを仕事にしておりますので、ぞうきんの汚い色というのは、誇れる色なのでございます。そんなぞうきん色の帽子をかぶった追手のゼッケンには、きれいと書かれていました。こんな矛盾があるのでしょうか。それでも、それがそのぞうきん色の帽子の目標なのかもしれませんし、座右の銘なのかもしれませんし、モットーなのかもしれませんし、人生におけるテーマなのかもしれませんし、ライフスタイルなのかもしれませんので、あえて突っ込むなどということはせず、わたしはただひたすら逃げ続けました。

汚い色の帽子の追手はなかなかわたしに追いつきませんでした。

なのでわたしもちょっと油断と隙を見せて、一瞬だけ立ちどまってしまいました。それがいけなかったのです。すぐに汚い色の帽子をかぶったきれいは、わたしのもとに追いつき、スライディングして、わたしの足にしがみつきました。

「ひあー」と言って、私はつかまれていない方の足で、そのきれいを踏みつづきました。きれいは、ぐちゃぐちゃになりました。

足跡のついてないところを選んで、私はきれいの欠片を一口口に入れました。今度は、イチゴチョコの味がしました。

走っても走っても、追手の数は増えるばかりで、わたしはいい加減に、もう疲れてきました。どうしよう。もうこのまま、つかまってしまおうか、と思ったその時、カマンベールしかなかっ

た道の先に、白いかまぼこが一つ置いてあるのを発見しました。そのかまぼこも、4 mくらいの高さがありましたが、ハートの形をしていましたので、カマンベールよりもかわいく見えました。わたしは助かったと思いました。あそこに隠れれば、助かる！

そう思って、わたしはかまぼこのかげに隠れました。

かまぼこの裏はシーンとしずかで、もう何も追いかけては来ないのではないかと思いました。わたしはさっきまで走っていた方をまた向き直してみました。その先には、ゴールがありました。

なにをもってそこがゴールなのかはわからないのですが、何か光っていて、ゴールっぽかったのです。

あとひと踏ん張りだ。とわたしは思いました。

わたしはかまぼこのかげから飛び出して、ゴールに向かって一直線に走りました。今度は本当に足が重くなり、息が切れてきました。もう追手が追っているのか、もう追っていないのかもわかりませんでした。

わたしはゴールの光の中へ、ホウキを持ったまま、飛び込んでいきました。

おめでとう、と、だれかがいいました。

おめでとうじゃないんだとわたしは思いました。

## 第36話 喧しい

---

今日は待ちに待った今月最後の日曜日だ。

今日こそは、思う存分買い物してやる。と、私は意気込んだ。と言っても、所持金は、一万円札一枚のみ、つまり、一万円である。

けれどこの一万円を確保するために、私がどれだけやりくりしたことか。

半年前から、ジュースやお菓子を買うのを我慢し、やっとたまった一万円なのだ。

それを今日、一気に使う。

何を買おうか、暖かいセーターか、ずっと買いたかったハードカバーの本を買おうか、それとも今まで我慢していたお菓子を一気に買おうか。それともそれとも……

考えるだけでわくわくしてしまう。私はさっそく朝からショッピングモールへ向かった。

開店からまだ時間が経っていないからか、ショッピングモールは空いていた。

私はまず、靴屋に向かった。

新品の靴達が、じっと待っている。そして頭をこちら側に向けて、待っていた。

どこへ行こうと勝手にしょ、と長靴が言っているように、ピカピカ光った。

私はなんだか腹がたって、靴屋を後にした。次に、駄菓子屋さんへ向かった。子どものころ、300円を握りしめ遠足のおやつを買いに行ったことを思い出した。ほしかったお菓子はなんだって買える。

私は次々にお菓子を選んでいった。かごがいっぱいになった。けれど、それをいざレジに持って行こうとした時に、私は財布がないことに気づいた。

「あれ？」

確かにカバンに入れたはずなのに。

すると、ピンポンパンポンと、店内放送が流れた。

「ご来店のお客様に、お忘れ物のご案内を、申し上げます。お財布が届いております。お心当たりのお客様は、屋上、隅、夢の国カウンターまでお越しください。」ピンポンパンポンと、また流れて、放送は終わった。

これだと私は思い、さっそく屋上へ行くことにした。

ん？屋上？

普通、一回の総合案内所など、わかりやすい所に取りに行くものじゃないのか？と私は思ったが、そのままエレベーターに乗った。屋上へどうやって行ったらいいのかわからなかったので、とりあえず1番上の9階を押してみた。エレベーターの中は混んでいて、私は後ろの壁にギュウと押し潰された。

7階辺りでほとんどの人が降りてしまった。そして8階で最後の一人が降りて私一人がぽつんと残った。

9階について一歩出ると、もうそこは屋上だった。

びゅうと風が吹いて、鼻の穴に入った。

夢の国カウンターはどこだろう。と、私は周りを見渡した。考えてみたら、夢の国カウンターという名前もちょっとおかしい。

確か隅って言ってたなあ、エレベーターの後ろの隅をみると、そこにこじんまりとしたカウンターがあった。

すらっとした女の人が、まっすぐ前を向いて立っているのが、横から見えた。

私は夢の国カウンターへかけて言って、聞いた。

「すみません、財布を落としたみたいなんです」

「はい、お財布ですね。どのようなお色でしょうか？また、どのような開封方法、また、どのようなイラストレーションが描いてあったでしょうか？」

「は...はい。緑で、チャックがついてて、猫の絵が描いてありました」

「はい、こちらに届いております。中味をご確認ください」

「そうですか、良かった」

中を確認すると、一万円札が一枚のみ、つまり1万円が、ちゃんと入っていた。

「入ってました！ありがとうございます」そう言って私は夢の国カウンターを後にした。

駄菓子屋さんにかごに入ったままのお菓子を預けて来たので、まずは駄菓子屋さんに行った。  
精算すると、ピッタリ777円だった。

なんだかラッキーな気がする。

—安心したので、私は色々な店を渡り歩いた。

けれど、赤いセーターを手に取った時、私はさっきから、なにか違和感を感じていることに気づいた。こんなに楽しいことをしているはずなのに、なぜか買物に集中できない。それどころか、イライラさえしているのだ。私は考えた。そして気づいた。

BGMが大きくなっている。

じわじわと、しかし確実に、さっきよりも今の方が、そして今よりも10分後の方が、音が大きくなっているのだった。曲調は静かだが、それも大き過ぎると害でしかない。

私はもはや買物よりも、そちらにしか耳が行かなくなってしまった。

ピンポンパンポン↑と店内放送が流れた。このBGMのお詫びだろうか。しかし、それは単なる忘れ物の放送だった。

「ご来店のお客様に、お忘れ物のお知らせを申し上げます。黒い、手袋が届いております。お心当たりお客様はは、屋上、夢の国カウンターへお越しくださいませ」

そして、しばらくすると、また大音量のBGMの合間に放送が入った。

「ご来店のお客様に、お忘れ物のご案内を申し上げます。白いマフラーが届いております.....」

そしてまたしばらくすると、放送がなり響いた。

「茶色のメガネが届いております。お心当たりのお客様は.....」

なんだって今日は忘れ物がこんなにも多いのだろう。

ピンポンパンポン↑

また鳴った。私は頭が痛くて、ついに「うるさいなあ、もう」と、つぶやいてしまった。

すると、放送は何も言わずに、ピンポンパンポン↓と、終わってしまった。なんだったのだろう。

それと同時に、あのうるさかったBGMも消えていた。

目の前がなんだかぼんやりする。私は何気なく鏡をみた。そこには、メガネをしていない自分がいた。

はっとして、私はかばんの中を探った。入店した時にかばんの中に突っ込んだ、黒い手袋と、白いマフラーが、なくなっていた。

## 【2016-04-16】指さし小説

<http://p.booklog.jp/book/106112>

著者：かっこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/resipi77/profile>

### 第1話 二丁拳銃

第一話からいきなりの難問。二丁拳銃ってなんぞやと調べることから始めました。手に二個拳銃を持って撃つことのように、現実には難しいようで。「二兎を追うものは一兎をも得ず」ということわざが頭に浮かびました。それをヒントに書いてみました。

### 第2話 撒収

第二話もなぜかハードなタイトルに…。平和主義なのに…。

撒収ということばは、退却を遠回しに言う時にも使うみたいです。なんか人間くさいですね。

負けを認めないという。でも今回は潔い感じにしたかったので、肘に言ってもらいました。肘が撒収すれば、自動的に手の指達も撒収しちゃいますからね。

私も膝痛もちなので、明日からまじめに体操します。

### 第3話 黒船躑躅

今回のテーマは「黒船躑躅（クロフネツツジ）」でした。漢字からして、また、おどろおどろしいものが出たかと思ったのですが、検索してみたら、かわいい花でした。最近、「でした。」と書こうとすると、「でした」になってしまうのは、私に東北の血が流れているからでしょうか。

### 第4話 一方（一かた）

今回のテーマは、「一方（一かた）」でした。初めて名詞ではなかったので、ちょっとびびりましたが、例文では、「作り方」なんてのも出ていて、色々作れそうだな、と思い直し、よし、「生き方」にしよう決めました。おじさん二人、なんだかいいですね。

### 第5話 嘉賞（かしょう）

今回のテーマは、嘉賞（かしょう）でした。いつもは韓国語の事典を使って指さししていたのですが、今回気分を変えて国語辞典でやってみたらいきなり難しい言葉が出たので、あわてて意味を調べました。というか事典なので隣りに意味が書いてあったのですが、上の人から褒められることだそうで、それでふと思い浮かんだ「チューリップ保護」ということばをかけて、作ってみました。指さし小説をやっていると、知らない言葉にどんどん巡り合えて、勉強になりますなあ。みなさんもぜひやってみてください！

### 第6話 弓取

今回のテーマは、弓取（り）でした。お相撲さんがやる弓取という意味もあったんですが、今回は、弓を射るのが上手い人という意味で、使いました。キューピッドのイメージが出てきてから急速に物語が出て来たのですが、その前はおすもさんのイメージしかなくて、なかなかできなくて困りました。ありがとうございます。

### 第7話 入貢（にゅうこう）

今回のテーマは、「入貢」（にゅうこう）でしたー！また意味を知らない単語が出てきたのですが、外国の使節が貢ぎ物を持ってくることを指すらしいです。みつぎものって！なんだか古めかしい響きですね。そして、今回の主人公はなまけものにしたのですが、最近なまけものぬいぐるみを買ってしまったことに起因するのであります。そしてなぜなまけものが好きなのかというと、小学生の時に、唯一できる鉄棒の大技（でもない）が、「なまけもの」という技だったからなのであります。片足と片腕だけで鉄棒にぶら下がり、ただそのままぶら下がっているだけというシンプルな技だったのですが、本当になまけものになった気分になれておすすめですよ。と、ということで、今回は冬の訪れを予感させる、季節感いっぱい短編小説になりましたね。寒いので、風邪にお気をつけください。

### 第8話 逸らす（そらす）

今回のテーマは、「逸らす」でした。久しぶりに知ってる言葉で、ほっ問題から、目を逸らす。これは今の私そのものです。やらなきゃならないことをほったらかして、こんな小説を書いている...いや、これこそが、本当にやらなきゃならないことなんです！！ね、定期購読してくださってる皆さま！

### 第9話 ソロ

今回のテーマは、「ソロ」でしたー。カタカナが来たのでびっくりしましたが、偶然つい最近動画で見ていたアイドルグループが、しきりにソロアルバムを出して〜と話をしていたので、この話のタネになりました。他にも最近の色々な出来事を元にして、この作品ができあがりました。一人が好きなんだけど、寂しがりやという人、意外と多いと思います。自分もその中の一人なのですが。

### 第10話 下線

今回は、ちょっと弱っていたので、わかりやすいお題で助かりました。下線。私は定規できれいに引くよりも、フリーハンドでちょっとがたがたな線を引く方が好きです。その方が、活字の中で、目立つからです。それに、自分で引いたってゆう感じがして、自分の意志で、重要だと思ってるという感じがするからです。っていうか、その方が、早く引けるからです！！

### 第11話 深い

今回のテーマは、「深い」でした。今回は、指さしに和英辞典を使ったので、割と有名な言葉が出ました。ほっとしたのもつかの間、意外と難しかったです。こんな感じになりました。

### 第12話 語調

配信が遅くなってしまい、すみません！！今回のテーマは、「語調」でした。同じ言葉でも、語調によって、聞く人に違う意味に捉えられる。だからこそ、語調が生まれる瞬間を見たくて作ってみました。けれど物語は意外な方向へ。そしてなんだか、テーマはこっちなんじゃと思うくらい、「ロイター版」ということばを使っていますね。跳び箱の前に置いてあるあれです。なんだか気に入ってしまったので、頻出してしまい、すみませんです。

### 第13話 風邪

今回のテーマは、「風邪」でした！あまりにも身近で、現実的なので、逆にやりにくかったです。自由な翼を羽ばたかせられなかった感があります。

と、いうのも、今年に入って私は風邪を引いてばかりで、一月も一カ月くらい風邪をずっと引いて、先月も一週間くらい風邪を引いていたのです。症状は軽いのですが、それがずーっと続いているのが地味に苦しくて、今年は本当に大変でした。ってまだ終わってないですが。

まあ、その体験をびよーんともっと長いスパンに伸ばしてみたら、ここ数年の私の運勢の悪さにつながったので、それを物語にしました。ちなみに、私は花の水を変えたことはあまりありません！

### 第14話 ぴくっと

今回のテーマは、「びくっと、びくっと」だったのですが、代表して、びくっとにしました。

でも、びくっとも一度登場していますよ。

びくっとということばを考えていたら、なぜかウサギが出て来たので、それを元にお話を作っていました。繊細な感じがするからですかね？

#### 第15話 可塑

今回のテーマは、「可塑」でした！はじめ、「過疎」？と思ったのですが、よく考えたら、可塑性とか何かの本で読んだことあることばだったので、なんとかできました。粘土のように、何かの力が加わって、元にもどらないことをいうみたいです。

#### 第16話 見事

今回のテーマは、「見事」でした。なんだか前向きなテーマなので初めはとまどいましたが、なぜかキャンプファイヤーのイメージが浮かんできて、それからは、すらすらとできました。マッチも、キャンプファイヤーも、砂利道も、最近みかけなくなってきました。なんだか懐かしかったです。

#### 第17話 いつも

今回のテーマは、「いつも」でした。

私の好きな歌で、いつも一緒にいてねという内容の歌詞があるのですが、冷静に考えると、ずっと一緒ってつらいよなあと思ってきたので、それをヒントに作りました。

夏は良いけど、この人冬はどうするんだろう。と思いますね。

電気毛布とか使うのかな～

#### 第18話 始まる

おこんばんは。皆さん、あっという間にまた一カ月が経ってしまいましたね。

私の中の砂時計は、あっという間に落ちてしまいます。

ところで、今回のテーマ「始まる」ですけれども、ちょっと私に希望を与えるテーマでした。

あっという間に過ぎ去る中にも、本当に自分のしたいこと、やり始める時なのだな。と感じました。きっと靴たちも、本当にやりたいことに向かう力を、雨から得たのだなと思います。意味のないことなんて、ないんですね～。

#### 第19話 歯釜

今回のテーマは、「歯釜」でした。「羽釜」じゃないんだなーと思いながら、書いてました。歯車とかと同じ種類の歯なのかなあと勝手に思いました。そして、今、深夜ですけども、とてもお腹がすいています。でも外はもう極寒だと思うので、コンビニにはいきません。

歯があるおかげで、かまどの中にそれ以上沈まないってことで、「それ以上沈まない」もテーマにした小説でした。ってここで説明するとむなしくなりますが。

#### 第20話 版

今回のテーマは、「版」でした。ちょうど、版画をしようと思っていた矢先だったので、なんとタイムリーと思いながら作りました。こういうことが、起きるんですねえ。世の中には。だから楽しくて、やめられません。

#### 第21話 本決まり

「これは根雪になるのかね～」 「どうだろうね～」という会話が雪国では毎年されているのですが、毎年、いつの間にか「あ、もう根雪になってる」と後から気づくだけで、はっきりいつから根雪だったのかというのは、意外とわからないものです。でも市長さんは知っていたんですね～。

#### 第22話 回る

今回のテーマは「回る」でした～

最初思い浮かんだのが、メリーゴーラウンドだったのですが、観覧車もそういえば回る！と思って書きました。観覧車なんてほとんど乗った記憶がないので、スキー場のゴンドラや、夜景を見に行った時のロープウェイを思い出して、書きましたので、本物の観覧車の感覚と違うかもしれません。

### 第23話 過剰

今回は、「過剰」というテーマでした。過剰反応とか、過剰サービスとか、せっぱつまったものを感じる一方、わんこそばのような、面白さも感じる。そんな過剰なお話を書きたくて書いてみましたが、そんなに過剰じゃなかったかもです。結局気持ちよくねむれてるしね。

### 第24話 あける

配信が遅くなり、本当に申し訳ありません！

今回のテーマは、「あける」でした。今回は、韓国語の辞書を使って、「(穴などを)あける」で、トンネルなどを通すという意味もあることばだったので、つい最近通ったトンネルのことを思い出して、またまたタイムリーだなと思って作りました。

### 第25話 こっくりとうなずく

今回のテーマは、「こっくりとうなずく」でした。

え？単語じゃないの？と思ったあなた、実はこれには訳があるのです。

今回使った辞書は、韓日辞書だったので、日本語で一語では表せない単語も入っていたのですねえ。

ちなみに、韓国語では、까딱というそうです～

私も初めて知りました！

今回のおじさんの教訓、高校生の時に先生に言われたことばなんですよ～  
歳をとるたびに、上手くいかない割合が、増えているような気がします。

### 第26話 結ぶ

今回のテーマは、「結ぶ」でした～

丁度指さしていたのが、実を結ぶというところだったので、木のイメージもあって、こんな物語になりました。  
今年は川辺の桜を7年ぶりに見に行けたので、その経験も入ってます。

### 第27話 ひよろ長い

今回のテーマは、見た瞬間ぷっと笑ってしまいました。

ひよろ長いのひよろって、すごくその形態を表している気がします。ひよろひよろっと。

私が小学校の時に育てていた朝顔は、12月になってようやく咲いたので、その朝顔のことも思い出しながら書きました。

### 第28話 めじ

今回のテーマは、「めじ」でした～

知らなかったのですが、メジマグロのことらしいです。

私はマグロが苦手で、あまりマグロ業界のことは詳しくなかったので、ゲと思いましたが、調べていくと、自分と共通点のある部分が.....

そんなところをお話にしました。

### 第29話 非才

今回のテーマは、「非才」でした。このことばが出たとき、あんた才能ないよ。と言われたみたいで、心にぐさっときました。けど、書き続けないと、生きていけない気がするので、この人みたいに、人知れず池を掘っていきたいと思います。

### 第30話 引ける

今回は、「引ける」が、テーマでした。最初に、会社から、どんどん人が帰って行く様子が目に浮かんで、その時の静かな感じをベースに作ろうと思い立ちました。

私も、不安になると、無性にテーブルの下にもぐりたくなり、実際にもぐる場合があります。なぜか落ち着きます。皆さんも、試してみてくださいね。

### 第31話 ブリーチ

第31話のテーマは、「ブリーチ」でした。脱色どころか、髪を染めることすらやったことがない私にとって、ちょっと難題かと思われましたが、漂白という意味があるらしく、何かの色に染める前に、色を抜くということで、何かを得るためには、何かを失わなければならないというようなことをテーマにしたらできるんじゃないかなと思って考えました。久々に、高校の時の社会科の資料集など取り出してみました。現在では菓子の変も、違う呼び方で紹介してる教科書もあるとか。時代の移り変わりが激しいですね。そして、私たちにとっては最近のニュースと思えることでも、今の子どもたちには歴史として学ばれているんだな—というのを感じました。

### 第32話 結ばれる

今回のテーマは、「結ばれる」でした～

みなさん、知ってましたか？私は知りませんでした。「結ばれる」と一文字違いですが、意味はえらい違いですよ。皆さん、調べてみてください。そしてこのことばは、今の自分にぴったり！なので、ちょっと変えていますが、今回の物語に出てきた悪い出来事は、ほぼ実話で～す！

### 第33話 むちゃ

第33話のテーマは「むちゃ」でした！

普段、心配性なので、あまりむちゃはしないのですが、むちゃの語源らしい、無作ということばから発想を得て、仕事を辞めるのは、むちなことだと思い、書き始めました。だらけた生活は、けっこう休みの日の私に近いです。でも、いつも3時36分くらいになると焦りからかいきなり活動的になるので、そんなことも織り込みながら書きました！

### 第34話 鞭打つ

今回のテーマは、「鞭打つ」でした～！なんだか最近の自分にぴったりのことば。と思って書き始めました。最近久々に行ったスキーの話を、ちょっと変えました。実際に靴がボロボロになったのは、父なんですけどね。

### 第35話 振り払う

はい、今回のテーマは「振り払う」でした。それを引いた時、今のわたしにぴったりのことばと思いました。誘惑が多いこの生活、本当にしたいことをするには、いろんなものを振り切っていかなければ、できないですよ。

ところでですが、本日から、わたくしのペンネームを、「かっこ」から「柿本慧こ」に変更いたしました。読者

登録をされている方（1名）に何か不都合があったら、申し訳ありません！！なにもないと良いのですが。これからも、よろしくお願いいたします！！

### 第36話 喧しい

さて、今回のテーマは、「喧しい」でした。このテーマを指さす前日に、店内放送の音量が大きくてイライラしたという出来事があったので、すんなりと今回のストーリーは決まりました。けれども途中で、財布をなくすというのは、書いてるうちに自然に出て来ました。なので当初は登場するはずではなかった夢の国カウンターも登場することになりました。

なかなか面白かったです。

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/106112>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/106112>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ